

517

7

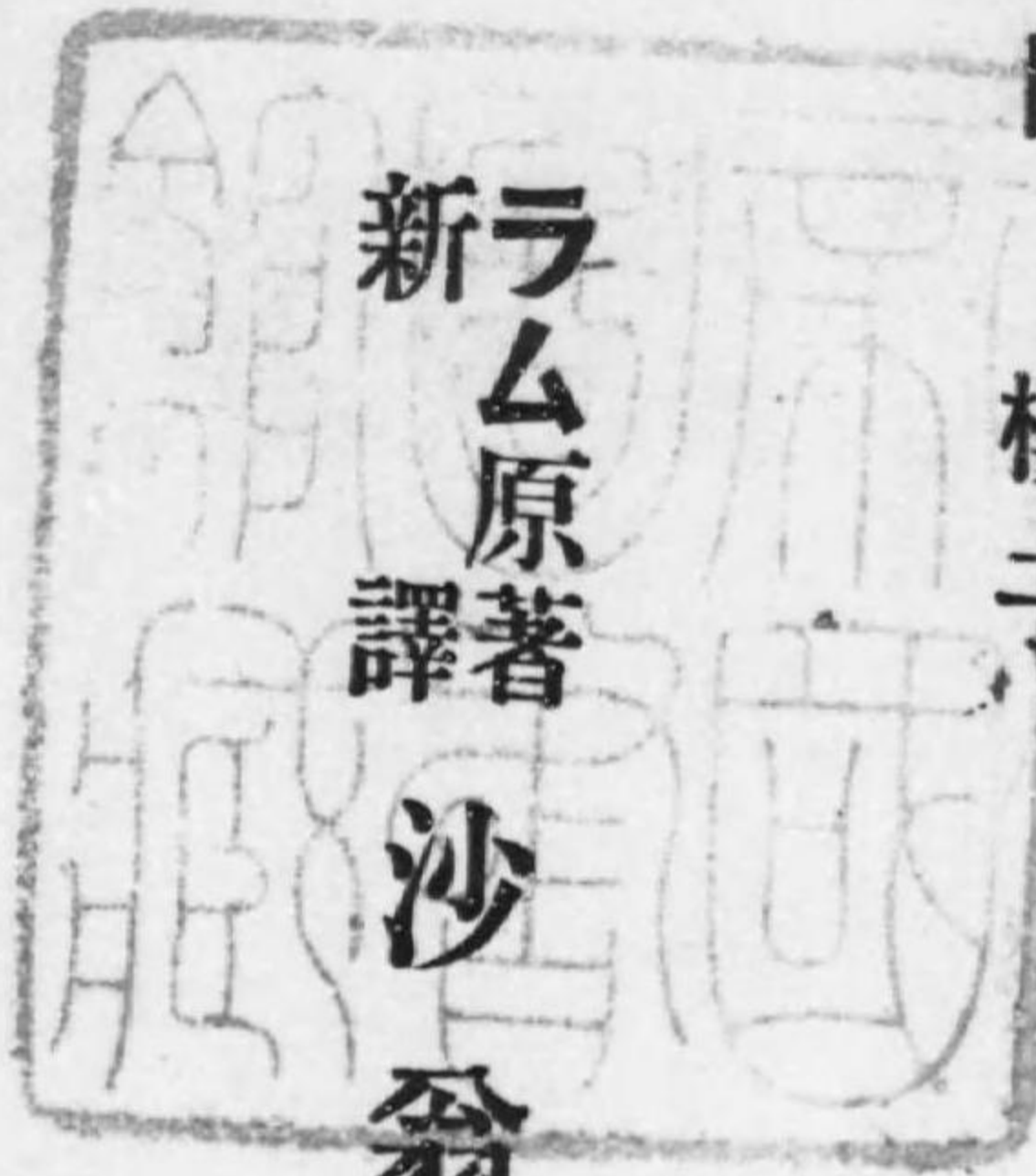


始



240

47-7



新原沙翁
 著
 譯
 劇物語

鹽見清
 櫻子共譯

東京
 文獻書院

大正
 11. 10. 20
 内交



SHAKSPERE

沙翁傳

- △希臘のホーマーと羅馬のダンテと共に世界三大詩聖とうたはれてゐる我がウィリアム・シェークスピア（沙翁）は今から三百五十八年前（西歴一五四六年）英國の片田舎ストラットフォードに呱呱の聲を擧げた。
- △四月二十三日に生れ、四月二十三日に死んだといはれてゐる沙翁の生涯は僅かに五十二年に過ぎなかつたが彼の力作四十の詩劇は獨逸の文豪ゲーテをして「書物も人物も將た又私の生涯に起つたごんな事件も沙翁の劇程私に強い印象を與へたものはない」とまで讃嘆させてゐる。
- △この感起す者は常にゲーテのみでない。沙翁の劇を通讀した者の等しく發する讚美である。沙翁の劇を通じて私達は萬人萬世に通ずる自然と人生とを如實に觀賞する事ができる。こゝに沙翁の天才の輝きと沙翁の永遠性がある。
- △偉人と時代人とは或る意味に於て敵味方である。時代人が觀賞するには餘りに偉人は優れてゐる。沙翁の天才を認めるのに、世界は少くも二三世紀を要した。彼の傳記や著作や、著作年代等に不明の點があるのもそれがためである。
- △沙翁は大學教育をも受けてゐない。十八歳前後に八ヶ年上のアン、ハサウエーとした早婚のためである。或は町會議長までしてをった父が事業に失敗したためであるともいはれてゐる。二十二の時倫敦に放浪して劇場の呼出掛になつたとも或は俳優の乗馬の番人になつたともいはれてゐる。
- △偉人は仆れても偉人である。間もなく彼は劇作者となり、俳優となつた。處女作「ヘンリー六世の第一編」を二十五の時に書いたとも、或は二十八の時であるともいはれてゐる。何れにしても三十三の時には「ロメオとジュリエット」と「リチャード二世」と「リチャード三世」を出版してゐる。
- △がやうに彼の傳記には不明の點が多いが、私達が沙翁を尊敬するのは彼が高い教育もなく然も貧困と戦ひながら、時代に先んじ、天才を適所に活用して、世界文學に貢獻する大事業を成就した點と、沙翁が悪の中にも善を認めて「Humanity」を人間の進むべき唯一無二の進路であると世界に指針してゐる點とである。私達は切に沙翁の劇を人々に奨める。

原著者ラム兄妹に就て

倫敦の眞中に**テンプル**と呼ばれてゐる古びた一區劃がある。中世の十字軍時代に騎士團（Knights Templars）が住んでをった處であるが、今は正義を楯とする辯護士町となつてゐる。

□

チャールズ、ラムはこゝに一七七五年に生れた。父は或る辯護士の貧しい事務員、否、寧ろ召使であつた。七人兄弟の中で、兄一人と**チャールズ**と妹一人とが成長した。七歳の時、基督病院の「青服」慈善學校へ入學した。十四の時學校を去つて南洋商會の事務員となり、二年の後有名な東印度會社に入社して、そこに三十三年間勤続した。その間一七九五年から一七九六年へかけて僅かに六週間療病院で妹を介抱するために休んだだけである。五十歳の時會社は彼が先に出版した「**エリア論**

叢」の好評なものと三十三年間勤続の勞とを構つて豊富な年金を與へて隠退させた。それは一八二五年四月の事である。一八三四年に彼は遂に不歸の客となつた。

妹のメリーは兄に劣らない天才であつたが、病身であつたので、チャールスは貧窮と戦ひながら一生獨身で妹の介抱に盡し、その友愛の暖かさは今に文學界の美談である。妹はチャールスよりも十三年遅れて一八四七年になくなつた。

ロングはその著「英國文學史」にラムの文學的作品を三期に分けてをる。第一期は一七九六年から一八〇三年まで、あつて「ロラマンド、グレー」(一七九八)と「ジョー
ン、ウツドビル」(一八〇二)等の作があり、第二期は一八〇八年まで、あつて、妹との合著我が「沙翁劇物語」(一八〇七)と「沙翁時代の英國詩人」(一八〇八)とである
第三期は一八三三年まで、あつて、「第一エリア論叢」(一八二三)と「第二エリア論

叢」(一八三三)とである。

ラムは英國浪漫派時代の作家であつて、バートンの「沈鬱の分解」や、フラウンの Religio Medici や英國の初代劇作家等に負ふ處が多い。作風は温雅と古風とを帯び人を引きつける魅力を持つてをる。名著エリア論叢はラムの稀代の古雅と侮り難いユーモアと彼の人生觀とを遺憾なく示してをる。英國初代の評論家アデイソンやス
テイルの美點を保ち、然も前人の及ばない見解の深刻さと輕快なユーモアとが溢
れてをる。

我が「沙翁劇物語」は、ラム兄妹友愛の結晶である。沙翁の力作、四十の劇から、英國史劇と羅馬劇とを除いた二十を選び、チャールスは悲劇を、メリーは喜劇を、難解な詩劇から平易な散文に書き直し、子供に沙翁を紹介するためにものしたもの

である。併し兄妹の努力は**エリザベス**王朝時代の英國散文の粹をなし、**アルフレツド**、**エイングラ**の語をかりて言へば——英國散文の音樂的作品——である。今は**古典文學**の一となつてをる。老幼男女と教育の有無とを問はず、**ラム**の「沙翁劇物語」は萬人に愛讀されてをる。初版以來既に一世紀を経てゐるが、今にこの書の右に出るものがなく、恐らく將來もないであらう。歐米の家庭に沙翁の原書はなくとも、この「沙翁劇物語」と聖書のない家庭はない。

□

「沙翁劇物語」の初版は「沙翁の劇を基礎とする物語」(Tales Founded on the plays of Shakspeare)と題して、倫敦「ハンウェイ街、少年文庫、トマス、ホツチキンスの爲めに印刷し、銅版で裝飾し、一八〇七年に少年用として、**チャールス**、**ラム**の名で出版された。挿畫は**マルレデー**の手になり、表紙にも、序文にも、**メリー**、**ラム**の名はないが、**メリー**が喜劇を書いた事は**チャールス**が前年五月十日に支那に行つ

た友人**マンニング**に送つた手紙に明かである。

『君は過日妹の書き物をしてをるのを見られたさうだが、妹は當時何を書いてをつたかを君に知らせたいと言つてをる。妹は**ゴルドウイン**書店の請によつて、沙翁の劇二十を子供の爲めに書きつゝあつたのである。既に「暴風雨」「冬の夜ばなし」、「夏の夜の夢」、「から騒ぎ」、「**ペロナ**の二紳士」、「**シンベリン**」の六編を終り、今「**ベニス**の商人」を書きつゝある。僕は「**オセロ**」と「**マクベス**」とを終り、悲劇を皆書かうと思つてをる。』

□

原著者の抱負はその序文に明かなやうに、少年少女に沙翁の作品を紹介し沙翁研究の手引とするためであるから、できるだけ沙翁の詩風を生かさうとした。悲劇の句は割合にその目的を達する事ができたけれども、喜劇の句は散文に直すのに困難を感じたと**ラム**の妹は述懐してをる。私達も亦原書の平易、温雅、流暢な文章を邦語

に譯するのに非常に苦心した。意明かで筆の運ばないのを遺憾に思ふ。併しできるだけ原文を尊重して句を追ふて譯したから、原書と對照して研究される人達には幾分か便利であらうと思ふ。

□

私達がこの「沙翁劇物語」を我國の讀書子に奨めるのは原著者が序文に書いてをるのと同じ志からである。「此書を若い讀書子に奨めるのは將來沙翁のほんとの劇を味ふ手引としてである。——想像の激増者、徳性の陶冶者、あらゆる利己主義や射利思想より蟬脱して、あらゆる幽しさ高尙な禮讓、仁慈、寛量、人道等を教へる思想と行爲の教訓——そしてこれ等の美德を教へる例證は沙翁劇の全紙面に充滿してをる。」

□

ラムの「沙翁劇物語」は専門學校や大學の英語の教科書等に多く用ひられてをるが

その邦譯は明治三十六年頃の序文のある「ラム沙翁物語集」を最近小松武治氏が出版されてをるだけである。そしてその物語數も全篇の半分即ち十編のみであつて、悲劇五編は和文躰、喜劇五編は口語躰に譯されてある。まだ全譯は誰にも出版されてゐない。

□

私達は右の事情からラムの全譯二十編を前後二卷に分ち「沙翁劇物語」として口語躰で出版する事としました。本書は即ち其前編に當る譯です。原本は紐育ハースト商會發行アルフレッド、エイングラー牧師編纂の「Tales From Shakspeare」を使用しました。

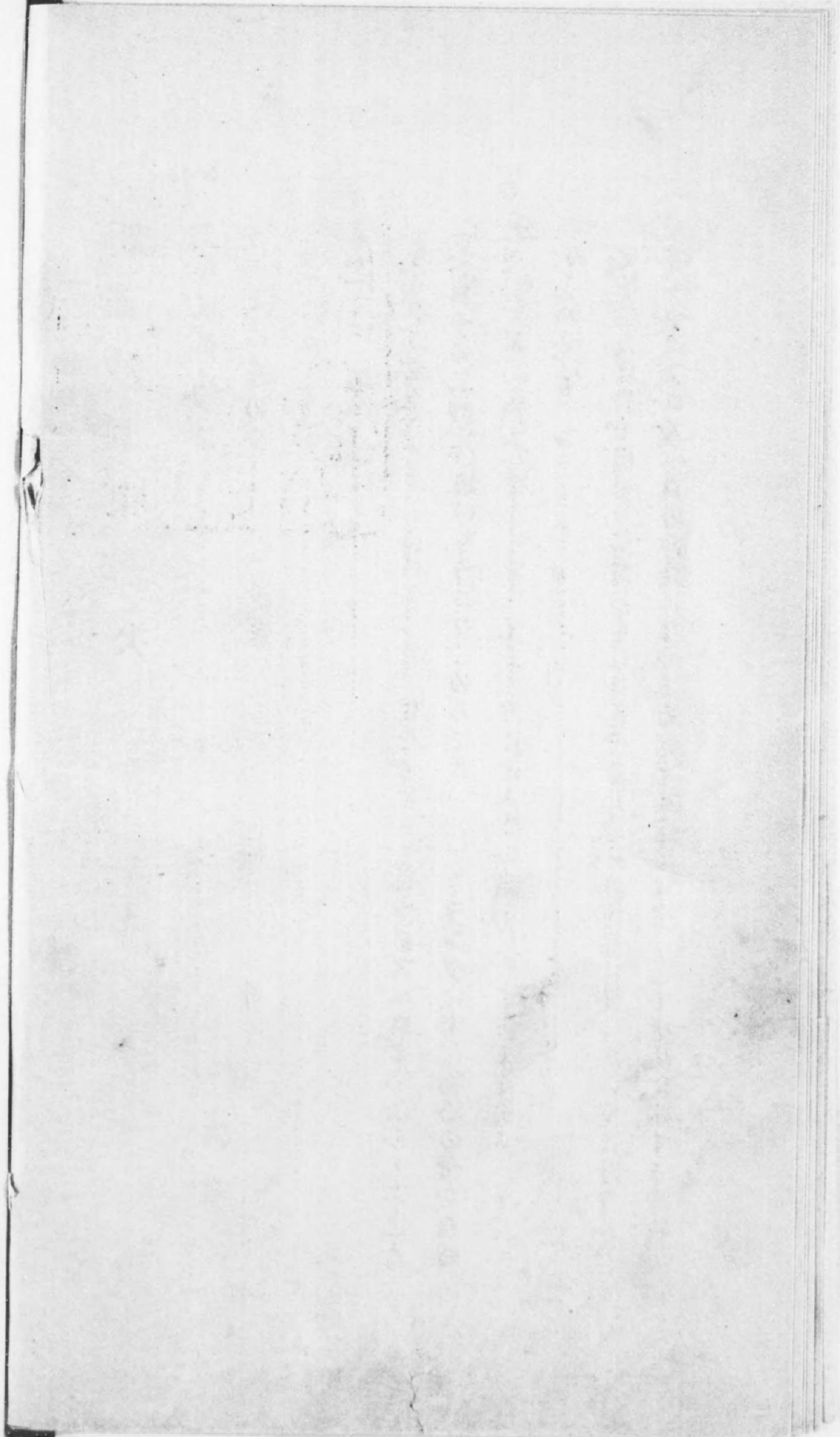
大正十一年九月二十五日京都にて

共譯者識

目次

暴風雨物語……………一
真夏の夜の夢……………二七
冬物語……………五四
から騒ぎ……………七九
お氣に召すまま……………一一〇
ペロナの二紳士……………一四四
ベニスの商人……………一七二
シムベリン……………二〇二
リヤ王……………二三一
マケベス……………二六〇

欠



欠

親友であるヘレナに戀を打明けた事があり、そのためヘレナは今もデメトリヤスを死ぬ程迄に想つてゐるのであると申し立てた。ハーミヤが父の命令に背くにはこんな立派な理由があつたのだが、厳格な老親を納得させる事はできなかつた。

慈悲深い偉れた公爵シシヤスも、この國法を變へる丈の権力を持つてゐなかつたので仕方なく、ハーミヤへ四日の暇を與へ、その間に善く考へて、その日の終りになつてもなほこの結婚を拒むならば、死刑に處すると言ひ渡した。

ハーミヤは公爵の面前から退くとすぐ、戀人ライサンダーの所へ行つて、自分の身に降り掛つた今の災難、即ちライサンダーを思ひ切つてデメトリヤスと結婚するか、さもなければ四日目には私は殺されねばならぬと訴へた。

ライサンダーはこんな狂暴な報知を聞いて非常に苦しみ歎いたが、ふと自分にはアゼンスから少し離れた所に住んでゐる伯母のある事を想ひ出した。其所ならば此の慘酷な法律もハーミヤを拘束する譯には行かない。(此の法律は市の堺を越えれば

執行されなかつた。ライサンダーはハーミヤに今夜父の家を抜け出して、自分と一所に伯母の家へ行つてそこで結婚しやうと話し「あなたと市から數哩離れたあの愉快な森の中で出會ひませう。あそこは私達が楽しい五月にヘレナさんと一緒に、よく散歩した處です。」とライサンダーが言つた。

此の思ひつきにハーミヤは喜んで賛成した。そして自分が街から逃げ出す計畫に就いては、友達のヘレナの外は誰にも打明けなかつた。ヘレナは（若い娘は戀故に馬鹿な事をよくやるものだが）非常に淺はかにも此の事をデメトリヤスに告げに行つた。友達の秘密を裏切つて何の利益になる譯でもなかつたが、唯自分の薄情な戀人の後から森まで行けるのが嬉しいと言ふ位な愚かな考へからであつた。ヘレナはデメトリヤスがハーミヤの後を追うて森へ行くと言ふ事をよく知つてゐたからである。

ライサンダーとハーミヤとが出會ふ約束をした此の森は、豆仙人と言ふ名でよく

知られてゐる小さな妖精達のお氣に入りの棲家であつた。

そして此の妖精達の王様オベロンと女王のチタニヤは、その小さな臣下共と一緒に此の森の中で眞夜中の酒盛りをして居た。

併し此の時、妖精の王様と女王との間に哀しい爭論が始まつてゐた。王夫婦は此の楽しい森の木の葉がくれの小路で、月の光に照らされながら出會ふやうな事は絶えてなく、口論ばかりするので、小さな妖精共はしまいには團栗の殻の中に這ひ込んで、怖れの爲めに縮み上つてゐた。

此の不幸な爭論の原因は、チタニヤが友達の子供である小さな取替子を、オベロンに拒んで與へないからである。女王は子供をその母親が死んだ時、その乳母から盗み取つて来て、此の森で育ててゐるのである。

ハーミヤとライサンダーとが此の森で出會ふ事になつてゐた其晩に、チタニヤは侍女達をつれて散る歩きをしてゐたがそのとき、丁度妖精の侍臣どもを召しつれた

オベロン王に出會つた。

「高慢家のチタニヤ、悪い所で出會つたね。この月夜に。」と王様が言ふと、「何ですつて、嫉妬ひきよらやきのオベロン。妖精共よ跳んでお行き。私達は決してあの人等と一緒に遊ばない筈なんだから。」と女王はやりかへした。オベロンは

「お待ち、向ふ見すの妖精。わしはお前の殿様ぢやないか。何故おまへは夫に逆らはうとするのだ。わしは小姓にするためにお前の小さな取替子をお呉れと言ふて居るばかりぢやないか。」と言つた。

「お諦あきらめなさい。あの子はお前の王國全部とだつて取代へはしませんよ」と女王は言つて、非常に怒りながら王の所を去つた。

「ふん、勝手に行くが良い。あすの夜明け迄にはこの仕返しにお前を苦しめてやるから。」と王は啖呵を切つた。

オベロンはすぐさま、彼の最も寵愛してゐる樞密顧問官のバツクを呼びにやつた

欠

欠

の爲めならば命をも惜まないとまでに深い愛を證據立ててをるこの佳人を非常に愛してゐたので、**ハーミヤ**を説いて朝迄柔かな苔の生えた堤の上で眠らせ、自分はそこから少し離れた所に横になつたが、間もなく二人とも深い眠りに落ちた。**バツク**は二人を見付け出した。そして立派な青年が眠つて居り又其着てゐる服が**アゼンス**風であることや、その側に美しい婦人の眠つてゐるのを見て、これこそ**オベロン**が探ね出せと命じた、**アゼンス**の娘と其不實な戀人だと思ひ込んで終つた。そこで**バツク**がこの様に二人きりで人里離れた所に居るのだから、男が起きた時に始めて見るのはこの女より外にあるまいと考へたのも全く無理のない話である。そこで**バツク**はもうぐずぐずせず男の眼蓋へその紫の小花の汁を滴らし込むだが折も折もここに**ヘレナ**が通り掛かつたのである。そして**ライサンダー**が眼を開いた時始めて見たのは**ハーミヤ**ではなく**ヘレナ**であつた。そしてまことにをかした話だが、その戀藥の效能の強かつたため、今迄の**ハーミヤ**に對する戀は總て消え去つて、**ライサン**

ダーはヘレナの戀に落ちてしまった。

ライサンダーが眼を醒した最初にハーミヤをさへ見てゐたなら、ハツクのやつた失錯も無事に済んだであらうに。いくらライサンダーでもあの信實な佳人ハーミヤをこれ以上に愛する事は出来なかつたであらうから。併し可愛相にライサンダーはこの玄妙な戀樂のために眞實な戀人ハーミヤの事を忘れて他の婦人を慕ふ様になり眞夜中の森蔭に獨り眠つてゐるハーミヤを置き去りにしてしまつた。

かくして、不幸な事件は起つた。前にも言つた通りヘレナは、デメトリヤスが自分を捨てて荒々しく一目散に逃げ出したので、男に追ひ付かうとして非常な努力をしたがこの不均衡な競走を長く續けて行く事は出来なかつた。長距離競走では男は女よりもよく走るものだ。ヘレナは程なくデメトリヤスを見失つてしまひ、そして落膽しながら寄るべもなく森を彷徨うてゐた時、ライサンダーの眠つて居る所へ來たのである。「おや、ライサンダーさんだ。地面に！死んで居るのか、眠つて居るの

か」とヘレナは靜かにライサンダーに觸りながら「もしもし、生きてらつしやるのなら、起きて頂戴よ」と言つた。この聲にライサンダーは眼を醒し、そして（戀樂が利き始めたのだ）すぐ様大げさな戀や賞讃の言葉で、ヘレナの美しくさはハーミヤよりも、鳩と鴉とが違ふ程優れてゐるさか、ヘレナの爲ならば火の中を駆け抜けでもするさか、そんな風の戀人らしい話を立て續けに語つた。ヘレナはライサンダーが友達のハーミヤの戀人である事も、結婚すると言ふ固い約束をして居る事も良く知つてゐるので、斯んな風に言ひ掛けられた時に、非常に怒り出した。夫れはライサンダーが自分を擁護つてゐるのだと思つたからだ（彼女としては道理な事である）。「あゝ情ない。何の因果で私はこんなに皆から嘲弄されるんだらう。私がデメトリヤスさんから一寸でも優しい目附で見てもらつたり、親切な言葉をさへ聞かされない丈で十分ぢやありませんか。もうそれで澤山ぢやありませんか。その上あなたにまでこんな輕蔑した様な調子で口説かれたりして。ライサンダーさん。私はあ

あなたはもつと誠のある紳士だとばかり思つてゐました。と言ひながら非常に怒つてヘレナは駆け出した。するとライサンダーは、未だ眠つてゐるハーミヤのことなど全く忘れてしまつて、ヘレナの後を追つて行つた。

ハーミヤは眼を覺して、一人其所に取残されてゐるのを知つて驚き悲しんだ。ライサンダーに何んな事件が起つたのか、又何處に行つたのかも知らずに、森の中を彷徨つた。然るに一方、デメトリヤスはハーミヤや戀の競争者である。ライサンダーを、彼方此方と探ね倦んだ末、疲れ切つて熟睡してゐるとき、オベロンに見出された。オベロンはさつきバツクから聞いた事によつて、バツクが間違つた男の眼に戀藥をつけた事を知つて居た。ところが今、最初に考へてゐた當人に出會つたので、すぐに戀藥をデメトリヤスの眼蓋につけた。間もなく眼を覺したデメトリヤスの眼に最初に映つたのは今まで逃げ回つてゐたヘレナであつたので、ヘレナに向つて戀の契ひを述べ始めた。丁度此時、ライサンダーはハーミヤに追ひ掛けられながらや

つて來た。(バツクの不幸な失錯のために、今度はハーミヤが戀人を追ひ掛けねばならぬ番になつた)斯くしてライサンダーとデメトリヤスは、二人共同じ功能のある藥の力のために一時にヘレナに對して戀を語り始めたのである。

驚きのあまりヘレナは、デメトリヤスもライサンダーも、又嘗ては無二の親友であつたハーミヤも、皆が一味になつて彼女を擲擄つてゐるのだと考へた。

一方、ハーミヤの驚愕もヘレナに劣らなかつた。デメトリヤスもライサンダーも以前はあれ程までに自分を愛してゐたのであつたのに今ではヘレナの戀人となつてしまつたのが一切譯が判らず、然も又其様子が何うしても戲談だとは思へなかつた。これまで一番親しかつたハーミヤとヘレナとまでが喧嘩を始めるといふ騒ぎになつてしまつた。

「まあ意地の悪いハーミヤさん。ライサンダーさんにあんな馬鹿な賞讃をさせて私を苦しめさせ、又あなたに戀して居たデメトリヤスさんはいつちも私を足蹴に返し

やうとしてゐた人であるのに、私を女神だとか水神だとか、絶世の美人だの、此の世ならぬ美しさだなどと言はせるのは、皆あなたでせう。あなたが私を揶揄ふためにあの人になんな事を言ふ様に言ひつけなければ、是まで私を嫌つてゐた人が何うしてそんな事を言ふものですか。男達と一味になつて可愛相な友達を嘲笑するなんて、何といふ意地の悪いハーミヤさんだろう。あなたは私達の學校時代の事をもうお忘れになつたの？。いつもく私達二人は同じ稽古縫ひをすることで、同じ蒲團に座つて、同じ歌を歌ひながら、同じ花を縫つたぢやないの。そしてまるで双子の櫻實の様に、滅多に離れた事もない程にして育つたぢやありませんか。それに、情誼も娘らしい嗜もあつたものぢやない。男達と一緒になつて、可愛さうな友達を嘲弄するなんて」とヘレナは憤りだした。

「わたし驚いてしまつたわ。貴女がそんなに眞面目になつてお憤りになるなんて。私は決して貴女を馬鹿になんぞしてゐません。貴女こそ私を馬鹿になさるんでせう

たんと然うなさい。根氣よう眞面目な顔をしておゐでなさい。そして私が後向いた時に舌を出して、互に目交をして、散々私をお笑ひなさい。あなたに少しでも慈悲か徳義か禮儀があつたなら、こんなに私を笑ひの種にはなさらなかつたでせう」とハーミヤはやりかへした。

二人が斯んな悪口を言ひ合つてゐる時に、デメトリヤスとライサンダーとは、二人を残してヘレナの戀の爲めに決闘をしやうとて森の中に行つてゐた。

デメトリヤスとランサンダーとの居ない事に氣のついた二人は、そこで別れて又お互の戀人を探ねながら、うろくくと森の中を彷徨つた。

二人が立ち去るや否や、バツクと共に今の爭論を聞いてゐた妖精の王は、バツクに言つた。

「バツク、これはお前の失錯だ。それともお前はこれを故意にやつたのか。」

「お信じ下さい陰影の王様。全く私の間違です。アゼンスの服装で見分けろとお

つしやつたでせう。併し此の争論は益々面白くなりますから私は後悔どころか却つてうれしくてたまりません。」「お前も聞いたらう、デメトリヤスとライサンダーとは決闘をするに都合の好い場所を探しに行つたのだ。予はお前に命する。今晚は深い霧を降らしてあの喧嘩好きの戀人達が、お互が見分けられなくなる程暗の中を迷はしてやれ。お前がお互の聲色を使つて、お互に競争者の聲だと思はせて置いて、何うしても相手がついて來なければならぬ様な悪口を言ふのだ。そしてお前は二人がもう一步も歩けない程疲れる迄これを續けねばならぬ。」「そして二人が眠つて了つたのを見とゞけた上で、草の汁をライサンダーの眼に塗れ。さうすれば今度、目を醒した時には、ヘレナとの新らしい戀などはすつかり忘れてしまつて、元の様にハミヤに對する愛情に歸るだらう。それで二人の婦人達もお互に愛する男と幸福に暮す事が出来るのだ。そして一同は此の事件を惱み多かりし一場の夢だつたと悟るだらう。バツク、お前はこれを急いでやつて來い。予はこれから行つて、チタニヤが

何んな奴と戀に落ちてをるかを見て來ねばならぬ。」「

チタニヤはまだ眠つて居た。オベロンは森の中で道を失つた道化者がチタニヤの側に、同じ様に眠つてゐるのを見た。「此奴がチタニヤの戀人になるのだらう。」「と言つて道化者の頭の上から驢馬の頭をかぶせた。そうすると生れ付きこんな頭をしてゐたかと思はれる程よく似合つた。オベロンは極く静かに、驢馬の頭をかぶせたのであるが、道化者はその爲めに眼を醒ましてしまひ、今オベロンがやつた事には少しも氣がつかずに立上つて、妖精の女王が眠つてゐる寢室の方へと歩き出した。

「まあ私は何といふ立派な天使を見るのだらう」とチタニヤが言つた。眼を開いた時には紫の小花の汁が利き始めてゐた。

「あなたはほんとに才色兼備の方でせう」

「さうでもねえだよおかみさん。今此の森から出られる丈の智慧がありや、今うんと役に立つただけぞ」と馬鹿道化者は答へた。

「この森から出たがつたりしちやいけないのよ」と心を奪はれた女王は言った。
 「私は唯の妖精ぢやないのよ。私はあなたを愛して居る。私と一緒にいらつしやい。
 侍女どもに言ひ附けて何でも御用をさせますから。」
 そこで女王は妖精を四人ばかり呼び出した。豆の花と蜘蛛の巣と、蛾と芥子の種
 との四人である。

「このお方に善くお仕へするのだよ。散歩の時には先に立つて飛び、或は前で跳
 り廻つて見せるのだ。まあ私の側へお座りなさい。可愛いあなたの毛だらけの頬を
 なぶらせて頂戴。美しい驢馬さん。あなたの奇麗な大きい耳に接吻さして頂戴。」

「豆の花は何處にゐる。」と驢馬の道化者は、妖精の女王の甘い戀には耳を借さな
 いで、召使が出来たので得意になつて言つた。

「はい何の御用。」
 「わしの頭を搔いてお呉れ。」

「蜘蛛の巣は何處にゐる。」

「はい此處に居ります。」

「蜘蛛の巣君。あすこの蘇の頂點ちやみ てるせんにゐる赤い見苦しい蜂を殺して来てお呉んなせ
 え。そして蜘蛛さん。奴さんの蜜袋を持つて来ておくんなせえ。あんまり威勢よく跳
 廻るといけましねえだよ。蜜袋を破らねえ様に氣を付けねえと、蜜が溢れてお前さ
 んが押潰おしつぶされちや大變だからな。芥子の種は何處だい。」

「はい此處に居ります。何ぞ御用で御座いますか。」

「何んでもねえんだ、芥子の種公。豆の花公を助けて私の頭を搔いて呉れ。わし
 お顔中毛だらけだもんで、散髪師へ行かにやならねえだ。」

「ねえ、可愛い人。何か喰べたくは無くつて。わたしの許には大膽な妖精が居る
 から、栗鼠の所へ行つて、蓄め込んである新らしい栗の實を取らして來ませうかね」
 と女王は言ふ。

Thistle
Thistle

「それよりも、わしは乾豆が手に一盃ほしいだよ。」
驢馬の頭をかぶせられたものだから、驢馬見た様なものが食べ度くなつたのである。

「併しお願だから、放つて置いてもらひてえな、眠くなつて来ただから。」

「それぢやお寢み。わたしが両手で抱擁して上げるから。まあ私どんなにあなたを溺愛してるか知れなくつてよ。」

道化者が女王の手に抱かれて寝てしまつたのを見すまし、妖精の王様はその前に現はれて、驢馬などに愛を捧げてゐるのを非難した。

女王は實際手の中に、自分が作つてやつた花輪を頭につけた驢馬を抱いてゐたので、これを否定する譯に行なかつた。

オベロンは暫時女王をからかつた末、又取替子の事を言ひ出した。女王は新らしい戀人と一緒にゐる所を見付けられた事を恥ぢてゐたので、王の命令を斷る譯には

行かなかつた。

常から長い間、小姓にするために欲しい欲しいと思つてゐた子供を得たあとで、王様は面白い計畫のために恥かしい状態に陥つてゐるチタニヤを憫れんで別な草花の汁を女王の眼に注いでやつた。そこで妖精の女王は直ちに正氣に歸つて今はもうこの奇妙な怪物を見るのも嫌だと言ひながら、何故あんなに溺愛してゐたのかを怪しんだ。

オベロンは又道化者の頭から驢馬の首を取つてやり、元のまゝの馬鹿な頭に戻してうたゝねをさして置いた。

オベロンとチタニヤとは今は仲直りが出来たのでオベロンはあの戀人達の話や、眞夜中の争論のことなどを語り聞かし、それから女王は王と一緒にこの事件の結末を見に行つた。

妖精の王様と女王とは、お互にあまり距てない草の上に戀人達とその佳人達が寝

て居るのを見付けた。それはバツケが、前の失錯の償をするために非常な努力で忠實に、彼等お互には知らさない様に、皆を同じ場所へ寄せて置いた。そして注意してライサンダーの眼に王様が呉れた解毒薬をつけて効能を消して置いたのである。

ハーミヤは最先に眼を覺し、見失つてゐたライサンダーが直ぐ近くに眠てゐるのを見附けて寝顔を見ながら急に氣が變つたことを不思議に考へて居た。ライサンダーは次いで眼を開いて愛するハーミヤを見た時妖精の魔薬で曇つてゐた理性を取り戻し、その理性と共にハーミヤに對する愛をも回復した。そこで二人はその晩の事柄を話し出した。あれが本當の事件であつたのかそれとも、二人とも同じ様な怖ろしい迷の夢を見てゐたのだろうかなど怪しみながら。

ヘレナとデメトリアスもその時眼を醒した。ヘレナはぐつすり眠つたので憤怒のために混亂して居た氣分も少しは靜まつて居た。そしてヘレナはデメトリアスが尙も自分に戀を告白するのを聞いて喜んだ。しかもその言葉が、驚いた事には又嬉し

い事には、ヘレナにはほんこの戀だと思はれ出した。終夜、さまよひ廻つてゐた、此の美しい娘達は、もうお互に競争者ではなくて、元の様な親しい友達になり、前に云ひ合つた失禮な言葉を互に許し合ひ、これからどうすれば一番良いのだろうかと皆で靜かに相談をし始めた。併し相談は直ぐにきまつた。即ちデメトリアスももうハーミヤの事をきれいに思ひ切つてしまつたのだから、一生懸命ハーミヤのお父さんを説き付けて、既に取きめられたあの慘酷な死刑の宣告を取り消させる様に努力しやうと誓つた。デメトリアスが此の幹旋のためにアゼンスの市へ歸る仕度をしてゐた時、不思議にも、ハーミヤの父イージャスが、家出した娘を探しに森の方へやつて來た。

イージャスはデメトリアスがもう娘との結婚を望んでゐないと言ふ事を聞いてはライサンダーとの結婚に反對しないばかりでなく、ハーミヤの死刑の執行日であつた四日目の日に、結婚さしてもよいと云ふ許しを與へた。そして其の同じ日にヘレ

ナは今は愛し愛されて居るデメトリヤスと喜んで結婚する事となつた。

この戀人達の仲直りの見えない見物人であつた妖精の王と女王とは、王の盡力のお蔭で二組の戀人達の仲が圓く治まつたのを見て非常に喜び、そして親切な妖精共は來るべき結婚の日には妖精の國中をこぞつて躍廻つて祝盃を上げる事に決めた。

若し讀者の中の誰かこの妖精やこの惡戯話を信せられぬとか、有り得ぬ事だとか言つて反對するものがあるならば、唯諸君は、眠つてゐた間に夢を見てゐたので、此等の事件は凡てその夢の中で見た幻影に過ぎなかつたのだと思つてもらへばよい。そして私は此の美しい何の害にもならない眞夏の夜の夢に對して、小言を言ふやうな譯の判らない讀者は一人もないことを望んでをる。

冬の夜物語

シシリヤ王リオンチーズと、淑徳の譽高い王妃ハーマイオ子とは、非常に仲睦し

く暮してゐた。王が此の世に優れた王妃を愛してゐた時には、何一つ満足されない願とてはない程に幸福であつた。併し唯一つありとすれば、學校友達であるボヘミヤ王ボリクシニーズと、も一度出會ひ、自分の妃にも紹介せたいものだと言ふ願であつた。リオンチーズとボリクシニーズとは、子供の時から一緒に育つてゐたが、父の逝去と共に、二人とも自分の國を治めるために呼び戻され、それ以來は長い間出會ふ機會がなかつた。併し二人は屢々贈物や、手紙や好友の使節などをとり交してゐた。

ボリクシニーズは幾度も誘はれるので、到々リオンチーズを訪問するため、ボヘミヤからシシリヤ宮廷を訪れることゝなつた。

最初はこの訪問こそリオンチーズにとつて例へやうのない喜びであつた。それで王は王妃にこの竹馬の友を特別に世話するやうにと獎めた。この昔馴染の親しい友達に出會つたので、王の幸福は凡て満たされ盡したやうに見えた。二人は昔の事ど

もを話し合つた。學校時代や青年時代の悪戯いたづらなどをも思ひ出して、そこに侍坐して興を添へてゐた王妃にも物語つた。

長い逗留の後、ボリクシニースが歸國の仕度をし始めた時、ハーマイオネは夫の願ひにより、夫と共に口をそろへてボリクシニースに、も少し逗留するやうにと奨めた。

併し此の時既にこの貞淑な王妃の悲しみが始まつたのである。と言ふのはボリクシニースは、リオンチーズに引き留められた時には斷つて置きながら、ハーマイオネの優しい言葉にとうとう出發を數週間延ばす事になつたからである。此のこと以來リオンチーズは、友人ボリクシニースの廉潔信義の人となりと、徳高い王妃の優れた性質をもよく知つてゐたにも拘らず、どうする事も出来ない嫉妬ねたみの心に捕はれてしまつた。

王妃が夫の格別な望によつて、唯慰めるためにボリクシニースを大事にすると、

その度毎に王の嫉妬ねたみは増すばかりであつた。リオンチーズは今まで愛に満ち信義に厚い友達であり、又此上もない善良な夫であつたのに、急に野蠻人より思はれない悪魔のやうな心になつてしまつたのである。リオンチーズは或日貴族の一人である、カミローを呼び、胸中の疑惑うたがひを打明けて、ボリクシニースに毒を飲ませるやうにと命じた。

カミローは善人であつた。そして王の嫉妬ねたみが實際根も葉もないことを良く知つてゐたので、ボリクシニースに毒を飲ませないで、王の悪計を知らせ、一緒にシシリヤ國外へ逃げ延びる様に説いて同意させた。そこでボリクシニースはカミローの助けに依つて無事にボヘミヤ國に着くことが出来、その時以來カミローはその國の宮廷に仕へて住むこととなり、ボリクシニースの無二の親友となつて寵遇を受けた。

然るにボリクシニースの逃亡は、一層嫉妬ねたみ深いリオンチーズを怒らした。リオンチーズはすぐ様王妃の居室に行つた。王妃はその時王子マミリヤスと一緒に座つて

ゐた。王子はお母様を喜ばせるために一番好きなお話の一つを語り始めやうとしてゐた。王はそこへ這入つて来て王子を連れ去り、ハーマイオネを牢獄に打ち込んでしまつた。

マミリヤスは、未だいたいけない子供であつたけれども、母上を深く愛してゐたので、母がこんな辱しめられたのを見、又牢に入れられるために自分の側からつれ行かれたのを知つて、深く心を痛めた。そして時の過つにつれて物思ひに耽り、母のこのみ心配して食慾も進まず眠りも減り、遂にはそのために死んでしまはないかと思はれる程であつた。

王は王妃を牢に入れると、クリオミニーズとディオオンと言ふ二人の貴族に命じてデルフォスへ遣り、其處でアポロー神宮の神託を伺つて、王妃が王に不實であつたか何うかを決める様にと吩咐けた。

ハーマイオネが牢に入れられてから間もなく、王妃は女の兒を産んだ。そして哀

れな王妃は可愛らしい嬰兒を見て非常に心を慰めた。そして王妃は言つた。「氣の毒な囚人よ、私もお前と同じ様に罪がないんだよ」と。

王妃にはシシリヤの貴族アンチゴースの妻であるポーライナと言ふ氣高い氣質の親切な友達があつた。そして此婦人は王妃がお産をされたと言ふ事を聞き、すぐに牢屋へ行つて、王妃の侍女エミリヤに逢ひ「エミリヤさん、お願いですから王妃様に、私をお信じ遊ばしてお姫様をお預け下さいますならば、わたしは屹度王様にお眼にかけませう。無邪氣なお姫様を御覧になれば、お氣が何んなに和らぐか知れませんから」と言つた。

「お情け深い奥さま。私はあなたの尊い御親切をすぐ王妃さまにお傳へ致しますせう。王妃さまもつい今まで、誰かこの子供を王様のお眼に掛けて呉れる程の友達でも居ないものかなど仰しやつて居られました」とエミリヤは答へた。

「それぢやね、私が王様に手強く、王妃様のお辯護を申し上げますとお傳へ下さ

50.]

「尊い王妃様へのあなたの御親切に對して、神様のお恵が永遠とこほにありませう様に。」
とエミリヤは言ひながら王妃の所へ行つてその事を話した。すると誰もこの嬰兒をその父王の所へ抱いて行つて呉れる人はあるまいと心配してゐた所なので、非常に喜んでポーライナに任せる事にした。

ポーライナは、夫が王の怒りを怖れて妨げやうと努めたにも拘らず、此の生れたばかりの嬰兒を抱き、勇氣を出して王の前に出て行つた。そしてその嬰兒を王の脚下あしもとに置いて、王妃のために雄々しくもその無實を辯護した。そして手厳てきびしく王の無道を責め、無實の罪に泣く王妃と姫君とを憐み給へと訴願した。併しその心よりの諫言いさめも唯王の不快を増したのみで、遂に王は夫のアンチゴースに命じて、ポーライナを王の面前よりつれ去らした。

ポーライナは出て行く時、其小さな嬰兒を父王の脚下に残して置いた。王が一人

になられたら、これを見てその無邪氣で寄る邊なき様子に同情を寄せられるだらうと思つたからである。

氣立てのよいポーライナの考へは間違つてゐた。ポーライナが出て行くや、否や無慈悲な王はその夫アンチゴースに命じ、この嬰兒を船に乗せて行き、何處か人里離れた海岸に置去りにして殺してしまへと吩咐けた。

アンチゴースはホヘミヤ王を助けた人の良いカミローとは違つて、王の命令通りに急いで嬰兒を船に乗せ、何處か人の居ない海岸が見附かり次第、そこに置き去りにしようと思へながら漕ぎ出して行つた。

王は王妃の罪を確信してゐたので、アポローの神宮へ神託を聞きにやつた二人の歸りを待つ事さへせず、まだお産の床から起きもせず、嬰兒を失つた悲哀から充分回復もしてゐない王妃を、宮仕へしてゐる貴族達の面前で裁判するために引き出した。國中の大名や裁判官や貴族達は王妃を審判するために集つた。そしてこの不幸

な王妃が臣下の前に判決を受けるために囚人として立つてゐた時、クリオミニーズとテイオンとが駆け歸り、王に嚴封してある神託を差出した。そこでリオンチーズはその封を切つて大聲に神託を読み上げよと命じた。次の様な言葉であつた。

「ハーマイオ子は貞潔なり。ホリクシニーズに罪科なし。カミローは忠臣なり。リオンチーズは猜疑心深き暴君なり。若し捨てたる其子にして發見せられざらんか、王はその嗣を絶たん。」併し王は此の神託に少しの信用をも置かうとせなかつた。そしてこれは王妃の友達がこしらへた作り事だと言ひ切り、裁判官達に王妃の取調べを續けて裁判をする様に命令した。其時、まだ其の言葉も終らぬ中に一人の侍臣が駆け込んで来て王子マミリヤスは母后が生死にかゝる裁判をされておる事を聞いて悲しみと恥辱との爲に衝心して、今亡くなられたと王に報告した。

ハーマイオ子は深く寵愛してゐた王子が、自分の不幸を歎き悲しんで、遂に落命したと聞いて氣絶した。リオンチーズもこの報知に心を貫かれ、不幸な王妃を同情

し始め、ホーライナや侍女達に命じて、王妃をつれて行かせ手厚く介抱をさせた。併し間もなくホーライナは歸つて来て、王妃の崩御を王に報じた。

王はその報知を聞き、始めて王妃に對してなした慘酷な行を後悔した。そして王はあの慘忍な行ひが、ハーマイオ子の心を破つたのだと悟り、王妃の無罪であつた事を信じた。そしてかの神託は眞實であり（若し捨てた其子にして發見せられざらんか）とあつたのは、海に運ばした嬰兒の事であらうと考へた。王子マミリヤスが死んでしまつたから、王には嗣が絶へてしまつたのである。

王は國と交換してでも、棄てさせた姫を探し出したいと願つた。そして親らは只管後悔の念にかられて、歎息の思出と後悔の悲しみとの裡に數年を送つた。

幼ない王女を乗せて海に乗り出した船は、風雨のために打流されて、ホリクシニーズの國であるボヘミヤの海岸に漂流した。アンチゴースは上陸して嬰兒を置き去りにした。

アンチゴーンナスは、王に復命するためにはシシリヤへ歸つて來なかつた。それはアンチゴーンナスが船へ歸らうと急ぐ途中に、森の中から現れた一匹の熊のために、八つ裂ざきにされてしまつたからである。邪よこしまな命令に従ふたものには正しい天罰である。

此の王女は非常に高價な着物をまどひ寶石などを着けてゐた。王妃が姫を王の前へつれて行かせた時に、大層立派な装束をしてやつたからである。アンチゴーンナスは王女の外套に紙片かみきれを附し、それにはパーテイタ（亡き人）と書いて置いた。これは暗あんに高貴の生れであり不運な者である事を示しておいたのである。

此の哀れな捨兒は羊飼に見附けられた。羊飼は人情のある男だつたので、その小さなパーテイタを家につれて歸り、妻もまた大切に之を育てたが、貧乏の淺間しさには、王女についてゐた寶玉類を隠して、何處でそんな寶玉類を得たかを誰にも知らせないために、住み馴れた土地を捨て、他へ移り行き、パーテイタの寶石の

半分で羊の群ぐんを買ひ、今では金持の羊飼となつてゐた。そしてパーテイタを自分の娘として育てたので、パーテイタも自分が羊飼の娘でないなどとは夢にも思つてゐなかつた。

小さなパーテイタもはや大きくなつて、愛らしい娘となつた。そして普通の羊飼の娘としてより以上に何の教育も受けてはゐなかつたが、母から受繼いだ天稟の麗質はその教育されない心をいやが上にも光輝あらしめた。その振舞を見た丈ならば誰でも父王の宮廷で育つたのだと言つても疑ふものはなかつたらう。

ホヘミヤ王ホリクシニーズにはフロリゼルと呼ぶ一人の王子があつた。此の若い王子がたま／＼羊飼の家の側で狩かりをしてゐた時、その老人の子供だと言ふ娘を見た。パーテイタの美しくしさ、慎み深さ、女王の様な舉措しよこを見てその場で戀する様になつた。夫れから間もなくドリクレスと言ふ名前で、普通の紳士のよそはを装ひ、絶えず羊飼の家の訪れるやうになつた。フロリゼルが餘り度々宮廷から出て行くのでホリク

シニーズは怪しんで、侍臣に吩咐けて王子を見張りさせ、終には羊飼の美くしい娘を戀してゐるのだと言ふ事を知つた。

そこでポリクシニーズは、リオンチーズの狂暴から自分の命を救つて呉れたあの忠義なカミローを呼びにやつた。そして自分と一緒にパーテイタの親父だと言ふ羊飼の家を訪ねて呉れるやうにと頼んだ。

王とカミローとは共に姿を變へて羊飼の老人の家へ行つた。其の日は丁度羊毛刈祭で大勢の者が集まつて居り、また此のお祭には誰彼の差別なしに招く習慣であつたから、王達二人は見馴れぬ者ではあつたけれど、中へ這入つて皆と一緒にお祭をする様にと請はれた。

家の中には歡樂と喜悅よろこびとが満ち溢れ、食事の用意も出來て居り、田舎祭の餘興なども、どつさり準備が整つてゐた。家の前の草原では若者や娘達が踊りを踊つて居り戸口の所では他の若者達が行商人からリボンや手袋や玩具おもちゃなどを買つてゐた。

此の盛んなお祭の最中に、フロリゼルとパーテイタとは隅の方に靜かに座つてゐた。そして陽氣な踊や遊戯あそびなどに加はるよりも、お互に話をしてゐる方がすつと樂しさうに見えた。

王は非常にうまく變装してゐたので、王子の眼でさへそれを見分ける事が出來なかつた。そこで王主従は二人の話が聞える様な近くまで近寄つて行つた。單純ではあるが優雅なパーテイタの話し振りには、ポリクシニーズも驚かすには居れなかつた。王はカミローに囁いて言つた。

「全く田舎いなかに稀な可愛らしい村娘だ。あの娘のする事なり様子なりには、卑しい羊飼の娘とは思へない氣高い所がある」

「全く、あの娘は牛乳ぎゅうにゅうや乳精にゅうけいを取る娘仲間の女王でございます。」

「おい親爺おやぢさん」と王は老羊飼に問ひかけた。「お前さんの娘と話をしてゐるあの奇麗な若者は誰だい。」

「ドリケルスとか言ふんですよ」と老人は答へた「あの男はわしの娘が好きで仕様がねえと言つて居りますが、本當の所を言へば、何方の方が一つキツス分丈でも餘計に惚れてるだか解りましねえだよ。若しあの男が娘を手に入れりや、思ひも掛けねえ幸福にあり附きますだ」その幸福とはパーティータの寶石の残りの事である。爺はその半分で羊の群を買ひ、残りの半分をパーティータの結婚の時にと思つて大切にしまつて置いたのである。

ホリクシニースはそしらぬ顔で王子に話し掛けた。「どうだな若い衆さん、お前さんは何か思ひつめてなさる事があるのか、お祭も何も忘れてしまつてる様だね。わたし達の若い時分にや、無暗と物を買つて戀人にやつたものだ。それにお前さんは玩具の一つも買はないで、行商人を歸してしまひましたね。」

自分の父親に話しかけられてゐる等とは思ひもよらぬ王子は「お年寄さん、彼女はあんなつまらないものはちつとも欲しがらないのです。彼女が欲しがらる物は只一

つ私の胸にしまつて錠が下してあるんです。」と答へ、そしてパーティータの方へ向き直つて言つた。「お、パーティータ、お聴き、このお年寄の前で、何うやら戀の經驗がおありの様だから……私の本當の心をこの老人にも聞かしてあげやう。」そしてフロリゼルはこの見知らぬ老人に、自分がパーティータと嚴かな結婚を誓ふ、その誓の證人になつて呉れと頼んで「どうぞ婚約の證人になつて下さい」と言つた。

「若い衆、それよりか離婚の證人にならう」と王は假装を解いて王子に近寄り、自分の賤しい娘などゝ婚約をした事を叱責して、娘の事を「羊飼の餓鬼」だの「羊のわな」などと散々悪口を言つた上、これ以後此の若者に出會つたりなどして苦しめる様なことがあるば、娘も父親の羊飼も共に斃殺しにしてやるぞと嚇し附けた。

王は非常に怒りながら羊飼の所を立出で、カミローに王子フロリゼルをつれて後から従つて來る様にと命じた。

王が去つた後ホリクシニースの罵言のために、パーティータは却つてその氣高い性

質に呼び覺されて言つた。「私達はたとへ賤しく貧しい身分であつても、少しも怖れ悲しみませぬ。私は一度も二度ももう少しで申し上げやうと思つたのです。王様の御殿にばかりお陽様はお照らしになるのではなくて、私共の小屋にでも同じ様に光を惠んで下さいますつてね。」それから「この夢はもう覺めました。女王さまの眞似なんかは、もう決してしません、あなた、どうぞお立ち去り下さい。私はこれから羊の乳搾り等をして、泣いて暮しませう。」と悲しげに言つた。

親切な心のカミローはパーテイタの様子の氣高く、又禮儀正しい事に心を奪はれた。そして王子が父王の命令でも尙戀人を思ひ切る事が出来ない程深く、娘を愛してゐる事を見て取り、相思の二人を助けてやらうと考へ、それと同時に心の中に秘めてゐた豫かねてよりの計畫を實行しやうと決心した。

カミローはシシリヤ王リオンチーズが心から後悔してゐる事を前から聞いて知つてゐた。今でこそポリクシニーズの寵臣となつてはゐるが、今一度前王に逢ひ又自

分の生家にも歸り度いと言ふ願を止める事が出来なかつた。そこでカロミーは相思の二人へ、自分と共にシシリヤの宮廷へ行く事を勧め、其處へ行けばシシリヤ王に願つて、ポリクシニーズが良く思案した末二人を赦し、結婚を許可するまで保護してもらはうと約した。

此の申出に二人は非常に喜んで賛成した。そしてシシリヤへ落ち延びる萬端の準備をしてゐたカロミーは、羊飼の老人にも同行する事を許した。

羊飼はパーテイタの寶石類の残りや、赤ん坊の時の着物や、外套についてゐた紙片まで持つて行つた。

愉快な航海の後、四人は無事にリオンチーズの宮殿に到着した。死んだハーマイオ子や失つた子供達に就て今迄歎いてゐたリオンチーズは、非常に喜んでカミローを迎へ、王子フロリゼルを鄭重に歡待した。フロリゼルが自分の妃だと言つてパーテイタを王に紹介した時には、王の凡ての注意はパーテイタに奪はれた。然も王妃が

死んだ自分の妃**ハーマイオ子**と生き寫しなのを見て、王の歎きは亦新たになつた。然し自分が王女をあのように酷く殺してしまはなかつたならば、きつと今頃はこんな美しくい娘ともなつてゐただらうにと思ひながら、**フロリゼル**に言つた。「それから、又私は貴殿の勇敢なお父様との交際や友情をも失つたのであるが、今では一度お目にかゝりたくてたまらん。」

羊飼の老人は王が**パーデイタ**に非常な注意をはらつた事や、その一人の娘を生れたばかりの時分に棄てた事を聞くに及び、**パーデイタ**が棄てゝあつた時の様子や、又寶石其他高貴の生れらしい證據品のあつた事や、自分が拾つた時などを思ひ合せて見ると、何うしても**パーデイタ**こそ、王の棄てたと言ふ嬰兒と同じだと思はない譯に行かなくなつた。

羊飼の老人は、**フロリゼル**や**パーデイタ**や、又**カミロー**や忠義な**ホーライナ**が居る所で、王に嬰兒を見附けた時の有様や、**アンチゴーナ**スが熊に殺されて死んだ事

情等を物語つた。老人が示した高價な外套は、王妃が嬰兒を包んでゐたのと同じ物である事、寶石も王妃が嬰兒の首に結んでやつたものである事等を、**ホーライナ**はよく覚えてゐた。更に老人が取出した紙片を見て**ホーライナ**は、夫の筆蹟に違ひないと言つた。そこで**パーデイタ**が王の一人娘である事はもう疑ふ餘地がなくなつた。併し夫が死んだと言ふ悲しみと、神託が本當になつて王の嗣となる可き、行衛の知れなかつた王女が見附かつたと言ふ喜びとの境に立つた**ホーライナ**の心はどんなであつたらう。王は**パーデイタ**が紛ふかたなき王女である事を知つた時、こんなに立派になつた我が子を見る事も出来ないで死んでしまつた王妃を憶ひ出して、悲しみに胸ふさがり、長い間言葉さへ出なかつた。が、唯「おゝ、お前のお母さんは、お前のお母さんは」と言つたのみであつた。

ホーライナは此の悲喜交々たる場合に、急に王に向つて、妾は最近伊太利の大藝術家**ジュリオ**、**ロマノ**に、新らたに塑像を作らせました。その像は王妃様に大層良

く似て居ますから、若し陛下がそれを御覧になるために家迄御臨幸になるならば、きつと亡くなられた王妃様であると思はれるに違ひありませんと言つた。そこで皆は打揃つて見に行つた。王は王妃の像を見たくてたまらず、パーテイタは生れて未だ見た事のない母上が、どんな人であつたかと非常に心を躍らせてゐた。

ポーライナが有名な塑像を納めてある室の幕を引くと、全くハーマイオ子其人としか思へない程よく似てゐたので、王の悲しみは甦つてしばらくは物も得言はず、身動きさへ出来なかつた。

「陛下、お言葉のないのは結構で御座います、深く御感心遊ばした證據で御座いますから。王妃さまにようお似申しておるでは御座いませんか。」

終に王は言つた。「この通りだつた。予が始めて言ひ寄つた時も、あの様な威嚴を以て立つてゐた。併しポーライナよハーマイオ子はこの像の様に年を取つちや居なかつた。」

「さう御覧になりますのならば、益々彫刻家の技術が偉れてゐるので御座います。今迄生きてゐらしやつたらと言ふ御姿を現しましたのですから。併しもう私は幕を閉ぢなければなりません、さもないとお氣のせいであつた様におぼしめすといけませんから。」

「幕を引くな。おれは寧ろ死んでしまひ度い。御覧！カミロー、全く息をしてゐる様に見えるぢやないか。あの眼が動く様に見える。」

「私はもう幕を引かなくてはなりません。陛下は餘り感動してゐらつしやいますから。今に生きていらつしやるなどとおつしやり兼ねませんもの。」

「おゝ、ポーライナよ。この上二十年も斯う思はせておいてくれ。……が、何うも像の方から微風そよかぜが来る様に思ふ。どんな名人だつて息まで作り着ける事が出来るだらうか。笑つて呉れるな。接吻をするから。」

「陛下、お待ち遊ばせ。お口元の彩具おのてはまだ乾いて居りません。繪具でお口が汚れ

ます。幕を引きませう。」

「いや、向ふ二十年間は幕を引いてはならん。」

此の比たくひない、母の像の下もとにひざまづいて、黙だまつたまゝ、尊敬の念を以て打仰いでゐたパーテイタは、言つた。「いつまでも、斯うしたまゝで、お母さんを見てゐたい。」

ポーライナは王に言つた。「感動をおとめにならねば、私は幕を引きませう。で御座りませんと、もつと驚愕びつくり遊ばす事が起ります。それを御承知ならば、わたくしはあの像を本當に動かせて、段を降りてお手を取らせませんが、よう御座りますか。併しさう致しましたら、妾が魔法を使ふなどとおぼし召すでせうが、勿論そんなものでは御座りません。」

「何、お前があれを動かせるつて？何う言ふ事をさせても予は喜んで見やう。何を言はせても予は喜んで聞かう。動かせる位なら、物を言はす事も出来るに相違な

301

そこでポーライナは、豫あらかじめめ用意して置いた誇おごりかなおごりなおごり音楽を始める様にと命じた。その時一同の非常に驚いた事には、彫像が臺から下りて来て、王を抱擁しその上話を始めて、王と新らしく見附つた愛兒パーテイタとの祝福を祈つた。

なにも王の首にすがり付き、王とその愛兒とを祝福したとて決して不思議ではない。決して驚くには及ばない。此の彫像こそ眞まことの生きたハーマイオネ其人であつたからである。

ポーライナは當時王妃の命を救ふ唯一の方法は、これより他に無いと思つたので死んだと偽いつはりを傳へたのであつた。その時以來ハーマイオネは氣立の佳いポーライナと一緒に、パーテイタが生きてゐたと言ふ事が知れる迄、決して王に知らせないつもりで暮してゐたのである。王が自分に對して與へた迫害は、盡く許してゐたが幼兒に對する残酷な行をば許す事が出来なかつたからである。

死んだと思つてゐた妃が生き返り、亡くなつたと思つた娘が見附かつたので、長い間歎いてゐたリオンチーズも、此の上ない幸福な身となつた。

國中到る所で聞かれるのは祝賀と愛に満ちた言葉のみであつた。斯くして喜びに溢れた王と王妃とは、賤しい境遇にゐた王女を、愛して呉れた事をフロリゼルに感謝した。又王女を助け育てた羊飼の老人をも勞らつた。カミローとポーライナも忠實に努めてゐた事が、斯んなに良い終りを告げる時迄生きてゐたのを、お互に喜び合つた。

此の不思議な思ひも寄らぬ喜びは、ボヘミヤ王ホリクシニーズがこの時宮殿へやつて來たので、全く申し分のないものとなつた。

ホリクシニーズが、その王子とカミローとがゐない事に氣が附いた時、カミローが豫てシシリヤへ歸り度いと思つてゐた事を知つてゐたので、きつと彼方へ逃げたに違ひ無いと思ひ、全速力で追つかけて來たのであつた。そして丁度リオンチーズ

の一生の中で一番幸福な時に、出會ふ事となつたのである。

ホリクシニーズも共々に喜んだ。リオンチーズから受けた無實の嫉妬ねたみに對して、その友を許し、二人共もこの子供時代の様な厚い友情を以て親交を結んだ。そしてもう、ホリクシニーズも王子とバーテイタとの結婚に反對をする恐れもなくなつた。バーテイタはもう「羊飼の餓鬼」ではなくて、シシリヤ王の嗣となつてゐたから。

斯くして長い間辛抱強く耐へ忍んで來た王妃の徳は報むかひられた。此の貞淑な王妃はリオンチーズやバーテイタと共に、母の中の母、王妃中の王妃として、最も幸福な月日を送つた。

か ら 騒 ぎ

メシナと言ふ所の宮殿に、ヒーロオと言ひ、ベアトリスと言ふ二人の令嬢が住ん

であつた。ヒーロオはメシナの太守リオナトの娘であり。ベアトリスはその姪であつた。

ベアトリスは陽氣な性質であつたので、いつも快活な悪戯をして、物靜かな性質の従妹ヒーロオの、氣を晴らさせるのが好きであつた。氣輕なベアトリスにとつては、何んな事が起つても、唯樂しく面白く思はれるばかりであつた。

この話が始まる時分の事であつた。丁度その時終つた戦争からの歸り路に、メシナを通り合せた軍隊の中の身分の高い青年達が、リオナトを訪問した。青年達はこの戦争で勇敢に戦つて、武名を擧げた。その中には、アラゴン王子のドン、ペドロや、その友達、フロレンスの貴族クラウデオや、そしてバドウアの貴族で、亂暴な然も頓智のあるベ子デイツクも一緒に來てゐた。

このお客達は前にもメシナへ來た事があつたので、太守は懇ろに客をもてなし青年達を古い友達や知人として、娘や姪に紹介させた。

ベ子デイツクは室に入るや否や、もうリオナトや王子達と元氣よく話し始めた。何んな談話の時にも仲間外れにされてゐる事の嫌ひなベアトリスは、ベ子デイツクを遮つて、「ベ子デイツクさま、あなたがいくらお喋りをしてゐても、誰も聞いてゐる人なんかありやしませんよ」と言ふと、ベ子デイツクもベアトリスに劣らぬお喋り屋ではあつたが、此の傍若無人な挨拶に不快を催し、身分の佳い令嬢が斯う多辯なのはあまり見つともよくないと思つた。又此の前メシナへ來た時にも、ベアトリスがいつも自分にはかり戯談を仕掛けた事などを思ひ出した。人をからかふ事の好きな人程、他人から揶揄はれる事を嫌がるものである。ベ子デイツクもベアトリスもこの例に洩れなかつた。それで、此の前の時も、此の二人の鋭い皮肉屋が出會ふ度に、二人は恐ろしい揶揄戦をやつたもので、其度毎に二人は不快な別れをするのが常であつた。そんな譯で今ベアトリスが、誰もあなたの言つてる事なんか聞いてやしないと言つて、彼の話を中斷した時、ベ子デイツクは今迄この婦人があ

た事に氣が附かなかつたやうな風を装つて、「やあ、意張り屋の令嬢、あなたは未だ生きてゐらつしやつたのですか。」と酬ひ、又もや戦争をおつばじめて、長い間やかましい議論の花を咲かせた。その間にベアトリスは、ベ子デイツクが今度の戦争で非常な勇氣を示して稱讃された事を良く知つてはゐたが、あなたの殺した位の人間なら私が皆食べて見せやうと言ひ、又王子がベ子デイツクの話に非常に興味を持つたのを見て、ベ子デイツクのことを「王子様の道化役」だと言つた。此の一言はベアトリスが前に言つたどの言葉よりも深く、ベ子デイツクの胸にこたへた。前にあなたが殺した位の人間なら私が皆食べて見せやうと言つて、彼を臆病者だと言つたのに對しては、自分が勇敢である事を知つてゐたので少しも氣に止めなかつたが、道化役と罵られた事程此の皮肉屋にとつて腹の立つ事はなかつた。皮肉といふものは時として當りすぎる事があるからである。そこでベ子デイツクは、ベアトリスが自分の事を「王子様の道化役」と言つた時から、全くベアトリスを惡む様になつた。

優やかなヒーロオは高貴なお客達の前では黙つてゐた。クラウデイオが、しばらく見なかつた間にヒーロオが急に美しくくなつたのを注意深く見守り、令嬢の立派な姿を（令嬢は非常に美しくかつた）見とれてゐた間に、王子は滑稽なベ子デイツクとベアトリスとの對話を聞いて非常に喜んでゐた。そしてリオナトに私話いた。「仲々快活な婦人だね。ベ子デイツクには持つて來いの妻君だ」殿下、どうしまして、若し二人が一週間も結婚してゐましたなら、きつとお互に喋べり過ぎて氣狂になつてしまふでせう」と斯様にリオナトは此の二人が氣の合つた夫婦にはなれないと思つてゐたが、王子は此の二人の鋭い皮肉屋がお互につり合つてゐると言ふ考へを捨てる事が出来なかつた。

王子がクラウデイオと一緒に宮殿から歸つてから後、王子はベ子デイツクとベアトリスとの結婚の事を考へてゐたばかりでなく、あの集りの中に、他にも結婚の事を考へてゐた者があつた事を知つた。クラウデイオは、その心の内に何を畫いておる

かと言ふ事が王子にはつきりと判る様な風に、ヒーロオの事許りを話した。王子はそれを喜んで、クラウデイオに、「お前はヒーロオを愛してゐるのかね」と言ふと、「お、殿下、私が此の前メシナへ参りました時には、好きだけれを戀してゐる暇が無いと言つた風の、軍人風の眼で令嬢を見てゐましたが、今度は幸福な平和時代なので、今迄は戦争の考へで埋まつてゐた場所へ、優しい微妙な考へが群がつて來ました。そしてその考へは凡て私に、若いヒーロオの美しくさや、自分が前から令嬢を愛するた事等を想ひ起させるのです。」とクラウデイオのヒーロオに對する戀の告白を聞いて王子は、すぐ様^{さま}リオナトに、クラウデイオを女婿^{むすめこ}とする様に頼んだ。リオナトは此の申出に賛成し、王子は優しいヒーロオをたやすく説きつけて、優れた才能を持ち、立派な人格のある貴族クラウデイオの申込を聞き入れさせた。そしてクラウデイオは、親切な王子の助けに依つて、リオナトを説いてすぐにヒーロオとの結婚式の日取を決めた。

クラウデイオが美しくしい令嬢と結婚するには、もう數日を待たばいゝのであつたが、若い人に有り勝ちな、何事に依らず自分が決心してゐる事件が終るまでは、非常に待遠しいものである。クラウデイオもその間が非常に長いと言つて不平をこぼした。そこで王子は、その時間を短かく思はせるために、愉快な遊びとして、ベ子デイツクとベアトリスとがお互に戀に落ちるやうな、うまい計畫をしやうぢやないかと言ひ出した。クラウデイオは非常に満足して王子の思ひ付きに仲間入りした。そしてリオナトも援助をする約束をし、ヒーロオさへも自分の従妹に良い夫をすゝめる位の優しい仕事ならばいくらでも賛成しやうと言つた。

王子が考へ付いた計畫と言ふのは、男子達はベ子デイツクにベアトリスが戀してゐると信じさせ、又ヒーロオはベアトリスにベ子デイツクが戀してゐると信じさせやうと言ふのであつた。

王子とリオナトとクラウデイオとの三人は、先づその計畫に取りかゝり、佳い機

會を覗つてゐたが、丁度ベ子デイツクが四阿あつまに腰掛けて靜かに讀書してゐた時、王子と助手達とは四阿あつまの蔭の木立の中で、皆の話しがすつかりベ子デイツクに洩れ聞える程近くに座つて、色々無駄話をした末、王子は言つた。「ね、リオナトさん、此の間あなたが言つてましたね。あなたの姪のベアトリスがベ子デイツクを戀してゐると、あの女おんなが男を戀しやう等とは思ひもよりませなんだがね。」と言ふと「え、私もその通りで御座りますよ。殿下、表面上の様子では嫌つてゐるとしか見えないベ子デイツクに、あんなに惚れてゐると言ふのは全く不思議でなりません。」とリオナトが答へた。クラウディオはこれに合槌を打つて、ヒーロオの言つた話に依るとベアトリスは、ベ子デイツクが若しあの女おんなを愛さなかつたら、きつと悶もだへ死んでしまふだらうと思はれる位、熱心にベ子デイツクを愛してゐるさうだと言ひ、リオナトとクラウディオとは、ベ子デイツクは凡ての婦人達、特にベアトリスに對して嘲笑ばかりしてゐる男の事だからとても駄目だらうと言つた。

王子は皆がベアトリスに非常に同情しておる様に、聞えよがしに言つた。「ベ子デイツクに此の事を話した方が良くはないだらうか。」「何う言ふ譯で、そんな事を言へばあの男はきつと擲なげ擲なげつて、あの可愛想な婦人をもつとひどく苦しめるでせうよ。」とクラウディオが言つた。王子は「若しあの男がそんな事でもすれば、首を締めて殺しても佳い位だ。ベアトリスは秀ひかでた立派な婦人であり。ベ子デイツクに戀しておる事を除けば、萬事に優れた智慧を持つてゐる」と言つて後、友達に向ふへ歩いて行く合圖をして、ベ子デイツクに今洩れ聞いた事を、熟考させるために、四阿あつまに残しておいた。

ベ子デイツクはこの會話を非常な熱心を以て聞いてゐた。ベアトリスが自分を戀してゐると聞いた時に獨り言を言つた。「そんな事が有り得るだらうか？何うしてそんな風向きになつたのだらう。」一同が行つて終つたあとで、一人でこんな風に考へ始めた。「これは別に魂膽のある筈がない。皆は非常に眞面目だつたし、ヒーロオから

その事を聞いたのだと言ふし、令嬢に同情して居つた様でもあつた。俺に戀をするつて、そしてその戀に報ひねばならんて！俺は結婚する事なんぞは考へてもゐなかつたが、俺も一生獨身で送るのだと言つた時にも、結婚せなければならぬ様になる等とは考へて居なかつた。皆は令嬢は徳があり美しいと言つた。そしてその通りだ。そして俺に戀なんぞする事を除けば仲々賢い。なに、あの女の戯談の事などは大した問題ぢやない。あゝ、ベアトリスが今向ふからやつて来る。こら、仲々別嬪だ。何か戀してゐる様な兆があるか何うかを探り出してやらう。」ベアトリスは近寄つて来て、いつもの様に突慳貪に言つた。「嫌々ながら、あなたに食事を報せに參りました。」ベネヂイツクは今迄に無い丁寧な調子で答へて見やうと言ふ様な氣になつて「美しいベアトリスさん。誠に御苦勞さま、有難う存じます。」そして二言三言へらず口を利用してベアトリスが去つた後、ベネヂイツクは令嬢の言つた亂暴な言葉の内に、親切な心が隠されてゐるのを見たと思つた。そして大聲で言つた。「若し自

分があつた女を庇つてやらなければ自分は悪黨だ。若しあの女を愛さなければおれは猶太人だ。さあ行つて彼女の寫眞を貰つて來よう。」

斯う言ふ風にこの紳士は自分のために擴げられてゐた網にうまくかゝつた。今度はヒーロオがベアトリスを擁護する番である。そこでこの目的を果たすためにヒーロオは、二人の侍女アースラとマアガレットとを呼びにやつた。そしてマアガレットに言つた。「ね、マアガレット。お前客間へ走つて行つて頂戴。あすこにベアトリスが王子様やクラウヂイオと話をしてゐるだらうから。そして耳に囁いて言ふんだよ。私とアースラとが果樹園の中を歩きながら、あなたの事ばかりを話し合つてらつしやいますと言ふんだよ。そしてこつそりと、あの太陽に熟れた忍冬が恩知らずの戀人の様に、陽の射すのを遮つてゐる四阿まで來る様に謀らつて頂戴。ヒーロオがマアガレットにベアトリスを來させる様に命じたこの四阿は、ベネヂイツクがつい先熱心に噂を聞いてゐたその同じ美しい四阿であつた。」

「かしこまりました。きつと直ぐにおつれ申します。」とマアガレットは答へた。

ヒーロオはアースラを伴つて果樹園の方へ行さ「アースラや、ベアトリスが来たなら、私等はこの小路を行つたり來たりして、ベネディツクの事ばかりを話さなければいけないよ。そして私があの人の名を言つたら、お前はあの人を何の男よりも偉いと言ふ風に出來る丈褒めるんだよ。私はベネディツクが何んなにベアトリスを戀してゐるかと言ふ事を話すから。さあ始めやう。向ふにベアトリスがたげりの様に身を屈めて、私達の話を聞きにやつて來る様だから」。やがて二人は始めた。ヒーロオはアースラが前に何か言つたのに答へる様な風にいゝえ、本當だよ、アースラ。あの女はあんまり横柄過ぎるよ。然し内心では岩に住んでゐる野飼の鳥の様に内氣で全く近付けない人よ。」

「でもベネディツク様が、ベアトリス様に心から戀してらつしやると言ふのは本當でせうか」

「王子様もさうおつしやるし、私の夫クラウディオもさう言ふのよ、そして私にその事をベアトリスに告げろつておつしやるのだけれど、私は皆様にさう言つたの。若し皆がベネディツクさんを愛するのなら、ベアトリスにそれを知らせてはなりませんね。」

「本當にさうで御座います。あの女はきつと戀してると言ふ事を知つたら、擲擄つてしまひなさるでせうから知らせるのは却つて良くないでせう」。

とアースラが言ふと。

「本當の事を言へば、私はベネディツクさんの様に賢くて、品があつて若くて立派な姿をしてゐる男の人はこれ迄に見た事がないわ。それにあの女はベネディツクさんの悪口ばかり言ふのよ。」

「さうです。さうです。あんなに咎め立てするのはあんまり褒めたものでもありませんね。」

「さうだとも。然し誰があの女にそんな事を言へるものかね。若し私がそんな事を話したら、屹度私を馬鹿にしてしまふだらうよ。」

「いゝえ、そんな事はありますまい。あの御方だつてベネディツクさんの様なあんな立派な紳士をはねつけなさる程物の見さかいが付かないと言ふ筈がありませんもの。」

「ベネディツクさんは名聲赫々たるものだよ。本當に私の主人のクラウデオを除いたなら、イタリイ中にあんな人は又とあるまいだらうよ。」

そこでヒーロオは召使に話を變へる様にと合圖をすると、アースラは「お姫さまあなたの御結婚は何時で御座います」と問ひ、ヒーロオは明日クラウデオと結婚する事を告げ、これから一緒に行つて、明日着る着物を新らしい服の中から選ぶ相談相手になつてくれと頼んだ。此の會話を息をこらして熱心に聞いてゐたベアトリスは、兩人が去つた時叫んで言つた。「私の耳に火を放けられた様だ。そんな事が本

當だらうか、輕蔑や嘲笑は逃げて行け。處女の誇りよ、左様なら。ベネディツクが私を戀するつて私はそれに報ひやう。私の荒々しい心をあなたの愛する手で和めて下さい。」

此の二人の敵同士が心を改めて、新たに親しい友達となり、又氣輕な王子の面白い計略に欺かれて、二人が戀し合ふ様になつてから始めて出會つた所を見るなどは大層愉快な事だつたに異ひない。然し今はヒーロオの運命が急に逆轉した事を語らなければならぬ。明日は結婚式だと言ふその日、ヒーロオとその善良な父とに新しい悲しみが起つたのである。

王子には母の異ふ弟があり、兄の王子と一緒にメシナへ來てゐた。此の弟は（名前はドン・ジョンと言つた）陰氣な、いつも不平ばかり言つてゐて、常に悪事を巧らむ事にはかり苦心してゐる様な男であつた。此の弟は兄の王子を憎み、王子の友達だからと言ふのでクラウデオをも憎んでゐた。そこで、唯クラウデオと王子と

を不幸に陥れて樂しまうと言ふ邪な考へから、ヒーロオとクラウデイオの結婚を妨げやうと決心した。弟は今度の結婚に就ては王子もクラウデイオ自身と同じ様に、熱心になつてゐると言ふ事を知つてゐたからである。そして此の邪な目的を果たすために、自分と同じ様に心の曲つたボラチオと言ふ男を、澤山の褒美をやるからと言つて雇ひ入れた。此のボラチオはヒーロオの召使マーガレットに交際を求めてゐたが、その事を知つてゐたドン、チヨンは、ボラチオに命じて、マーガレットにその晩ヒーロオが寝てしまつた時分その寢室の窓から顔を出して、ボラチオと話をする様にと約束をさせた。そしてクラウデイオにその女がヒーロオであると言せしめるために、ヒーロオの服を着て出る様にと命じた。さう言せしめやうと言ふのがこの悪い計畫の目的であつた。

ドン、チヨンは一方、王子とクラウデイオの所へ行き、ヒーロオは浮氣な女で、眞夜中に自分の寢室の窓から他の男と話をしたり等してゐると語つた。しかもそれ

が結婚すると言ふ前日に起つた事なのである。だから自分と一緒に今晚、ヒーロオが窓から男と話すのがよく聞える所迄行かうと申し出た。二人は賛成して弟と一緒に行く事にした。そしてクラウデイオは「若し今晚私が何か見付けたならば私も結婚しなくても構はない。そして明日結婚する筈になつてゐる式場で、あの女に恥をかゝせてやらう。」と斷言し、王子も「私もあの女を得る爲には援助をしてあげたのだから、私も一緒になつて辱かしてやらう。」と言つた。

ドン、チヨンがその晩二人をヒーロオの寢室の側迄つれて行つた時、ボラチオが窓の下に立つてゐるのが見えた。そしてマーガレットがヒーロオの窓から身をのぞかせて、ボラチオと話しておるのも見えた。マーガレットはヒーロオが着てゐたその同じ着物を着てゐたので、王子もクラウデイオも共に、それがヒーロオだと信じ切つた。

クラウデイオが此の秘密を見破つた時（と思つた丈なのであるが）の怒りと言ふ

ものは例へる物もない程であつた。無邪氣なヒーロオに對する愛はすつかり一時に憎みに變つてしまつた。そして前にさう言つた様にその翌日教會で娘の秘密を發いてやらうと決心した。王子も、此の高貴なクラウデイオと結婚するといふその前の晩に、自分の窓から他の男と話をしたり等する様な淫らな婦人に對しては、何んなに酷い罰を下しても未だ足りないと思つたので、すぐこれに賛成した。

次の日皆が結婚の式に集つて、クラウデイオとヒーロオとが牧師の前に立つてゐた。そしてその牧師が結婚の宣誓をする爲に前に進み出た時、クラウデイオは非常に興奮した句調で無實のヒーロオの罪を述べ立てた。ヒーロオはクラウデイオの言ふ思懸けない言葉に吃驚してしまつてももの靜かに言つた。「まあそんな亂暴な事をお言ひになつて、あなたお氣はたしかなのですか」

リオナトは全く驚愕して王子に言つた。「何故あなたは黙つてゐらつしやるのです」

「何を言へとおつしやるのです。私は親友に價値の無い女と結婚させやうとした事を恥かしく思つてゐるのです。リオナトさん、私は名譽にかけて誓ひます。私自身と、私の弟と此の哀れなクラウデイオとは昨晚眞夜中にヒーロオが自分の寢室の窓から他の男と話してゐたのを實際に見たのです。」

ベネデイツクは此の不時の事件を聞いて驚いて言つた。「まるで結婚式になつてゐやしない。」

「本當に、おゝ神様」と悲痛の極に達したヒーロオが答へた。そして此の不運な婦人は氣絶して倒れた。皆は死んだものと思ひ込んだ。王子とクラウデイオとは止まつて、ヒーロオが蘇生するか何うかを確かめもせず、又リオナトを絶望の淵に陥れて置きながら、そんな事を一切構はずに教會から出て行つてしまつた。二人共怒りの爲に此んなに無情になつてゐたのである。

ベネデイツクはベアトリスと共にヒーロオを助けるために止まつてゐた。「一體何

うしたんだらう」「なくなつたのでせう。」と自分の従妹を愛してゐたペアトリスは非常に悲しみながら答へた。そして又従妹の氣高い主義を知つてゐたので、今聞いたヒーロオを陥れるやうな事柄は何一つ信じなかつたが、氣の毒な父はさうではなかつた。父は娘の不名譽を信じた。そして死人の様に倒れてゐる娘の前で、もう二度と眼を開いて呉れるなど言ひながら、悲歎に暮れて居るのを見るのは如何にも憐れの極であつた。

併し老牧師は賢い人であつて、人間の性質を良く見極めてゐた。そして注意深く令嬢が呪の言葉を聞いてゐた時の顔色を見守つてゐた。その時娘の顔の色が急に恥辱のために眞赤になり、やがて天使の様な純白に歸つた事を知つてゐた。令嬢の眼の中には、王子が言つた様な、處女としての神聖を傷けるやうな悪行があつたとは思へない清い焰が燃えてゐるのを見破つた。それでこの老牧師は悲しんでゐる父親に言つた。

「若しこゝに倒れて居られる令嬢が或る惡むべき間違ひのために無實の罪を蒙つておるのでないならば、私を馬鹿とお呼びなさい。私の學問も、私の觀察も、私の年齢も、私の威徳も、又は私の傳道をも凡てを信じて貰はなくても構ひません。」

ヒーロオがやつと息を吹き返した時、牧師は娘に言つた。「お嬢さん。あなたが疑はれておる對手の男とは誰なのですか」

「あの人達は知つてゐて私を責めるのでせうが、私はそんな人は全く知りません。」さう言つて父親の方を向いて「おゝ、お父さま、若しもあなたが、私が男と眞夜中に話をしたとか、又は昨晚誰かと言葉を交したとかいふ證據がありますならば、私を追ひ出し、私を憎み、そして私を毆殺しにして下されても結構で御座ります。」

「王子とクラウディオとは何か妙な感違ひをしてゐるに相違ない。」と老牧師は言つた。そしてリオナトに勸めてヒーロオが死んだと二人に告げさせた。二人が立去つた時ヒーロオはまだ氣絶してゐたから、二人は易々とそれを信ずるだらうと言つた

のみならず。父に奨めて喪服を着させ、娘のために記念碑を建てたり、埋葬の儀式を残らずやるやうにと申し添へた。

「そんな事をするとは何うなるんです。一體何のためにそんな事をするのです。」

「娘さんが死んだと言ふ事を知らせたならば、問責が憐憫に變るかも知れません。さうなれば良いが、私の望んでゐるのは唯それ丈の事ではありません。自分の悪口のためにヒーロオが死んだといふ事を聞くと、ヒーロオの命と言ふ觀念がクラウディオの想像の中へうまく喰ひ込んで行くでせう。そして若しクラウディオの心の中に愛があつたとすれば、悲しみの情を生じ、例へ自分ではあの問責は眞實であると考えへてゐても、あんなにひどく罵らなければよかつたにと悔むでせう。」

ベネテイツクも言つた。「リオナト様。牧師の忠告にお従ひなさい。私は何んなに王子やクラウディオを愛してゐるかは御存じでせうが、それでも私は名譽にかけてこの秘密は他言致しませぬ。」

リオナトは斯ふいふ風に説き付けられて、納得して、悲しげに言つた。「私はもう悲しさで心が一ぱいですから、何んな事にでも従ひませう」。親切な牧師はリオナトとヒーロオと慰め勞はる爲に他處へつれて行き、あとにはベアトリスとベネテイツクとが唯二人残つてゐた。

これが二人きりで會つた最初の會合であつて、友人達が慰みに計畫し、非常に面白い結果を豫想しておつたものであつたが、肝心の友人達はもう苦惱のために氣が轉倒して、その心からは、凡ての愉快な考へは消え去つてしまつてゐる様に思はれた。

ベネテイツクの方が先づ口を切つた。「ベアトリスさん、あなたはさつき泣き續けてゐたのですか。」

「えゝ、これからも未だしばらく泣き續けるでせう。」

「確かに、私はあなたの美しい従妹が間違へられてゐるのだと信じてゐます。」

「若しも誰かが私の従妹の罪を晴らして呉れるなら、私は何んなにでもお禮をしますのね。」

「どうしたら、そんな友情を示せませうか。私は世界中で一番あなたを愛します。不思議ぢやありませんか。」

「私もあなたと同じ様に、世界中で一番あなたを愛してゐると言ふ事が出来ればよいのですが……然し私を信じないで下さい。と言つて私は嘘を言つてゐるのではありません。私は告白してゐるのでもなければ、又否定してゐるのでもありません。私は従妹の爲に悲しんでゐるのです。」

「私の劍に誓つて言ひます。あなたは私を愛してゐます。そして私もあなたを愛してゐると断言します。さあお言ひなさい。あなたの爲なら何でも致しませう。」

「クラウデイオを殺して下さい。」

「は、それ丈は廣い世界を貰つても出来ませぬ。」とベネディツクは言つた。それ

は友人のクラウデイオを愛してもゐたし、又クラウデイオが瞞されてゐたのだと信じてゐたからである。

「私の従妹を譏り、罵り、辱かしたたクラウデイオは悪黨ぢやありませんか。お、私が男であればいゝのに……」

「まあお聞きなさい、ベアトリスさん。」とベネディツクが言つたが、ベアトリスはクラウデイオの辯護は少しも聞かうとせなかつた。そして自分の従妹の復讐をして呉れど強請り續けた。「窓から外の男と話をする位當り前の事です。可愛想なヒーロオさん、あの女は誣ひられてゐるのです。譏られてゐるのです。害なはれてゐるのです。お、私が男であればクラウデイオをこの儘にはして置かぬのに。誰か私に代つて男になつて呉れるお友達が欲しい。勇氣は禮儀だとかお世辭などに代つてしまつたのか。希望を持つ男となる事が出来なければ、悲歎をもつ女として死んでしまひませう。」

「ベアトリスさんお待ちなさい。私はこの手に誓つて、あなたを愛します。」
「私を愛されるなら、あなたの手で誓を立てたりするよりも、その手を何か他の事に使つて下さい。」

「あなたは心から、あのクラウディオがヒーロオを譏つてゐるのだと思つてらつしやるのですか。」

「さうですとも、私が考へたり、魂を持つてゐたりするのと同じ様に確かな事ですよ。」

「よろしい。私は引き受けました。私はあの男と決闘をしませう。あなたの御手に接吻して出掛けませう。此の手で私はクラウディオに高い價を拂はせやう。私はあなたにお便りを致しますから私の事を思つてゐて下さい。さあ、行つてあなたの従妹を慰めておあげなさい。」

ベアトリスが斯く心を込めてベネディツクを説き、怒氣を含んだ言葉でベネディ

ツクの仁侠の精神を動かし、ヒーロオに味方して、親友クラウディオと戦はうとさへ決心させてゐた間に、リオナトも亦、娘が受けた恥辱に對して劍を以て答へよと王子とクラウディオとに決闘を申込んだ。そして娘はそのために歎いて悶死してしまつたと斷言した。然し二人はその父の年やその悲歎を氣の毒に思つて「まあ御老人、我々と戦ふ事丈はやめて下さい。」とすかしておる所へベネディツクも亦駈けて来て、クラウディオにヒーロオに與へた恥辱に對して劍を以て答へよと、決闘を申込んだ。クラウディオと王子とは互に「ベアトリスがこんな事をさせたのだね」と言ひ合つた。クラウディオは、今の場合決闘に依つて勝負を決するより外に、ヒーロオの無罪を證明する丈の、天に恥ぢない正義を持つてゐなかつたので、ベネディツクの挑戦を受けない譯には行かなかつた。

王子とクラウディオとが未だベネディツクの挑戦に就て話し合つてゐた時、一人の長官がボラチオを罪人として王子の前へつれて來た。ボラチオがドン、ジョンに

頼まれてした悪戯の事を仲間の一人と話し合つてゐる所を聞かれてしまつたのであつた。

ボラチオはクラウデイオや他の人達の居る前で王子に逐一白状した。皆がヒーロオに違ひないと誤解してゐた窓から自分と話をしてゐた婦人は、主人の着物を着てゐたマアガレットであつた事を語つた。クラウデイオや王子がヒーロオの無實を信じたのは言ふ迄もない。そして多少疑を抱いておつても自分の悪事が既に露見した事を知つて、兄の正しい怒りを避けるために、ドン、ジョンがメシナから逃亡したと言ふ事を聞いては最早や少しの疑ふ餘地もなくなつた。

クラウデイオの心は自分が誤つてヒーロオを責め、自分の残酷な罵詈を聞いて憤死したのであると考へて、非常に胸を痛め、自分の愛してゐたヒーロオの幻像が、戀し初めた時と同じ様に美はしく眼に浮んで來た。そして王子から、今ボラチオから聞いて、はらわた腸を刳られる様な氣はしなかつたかと尋ねられたのに答へて、ボラチオ

が白状してゐる間自分は毒を吞まされてゐる程に苦しかつたと言つた。

そこで後悔したクラウデイオは、リオナトに向つて、自分が令嬢に與へた侮辱を許して頂きたいと願つた。そして自分が婚約した妻に對する誤つた罪狀を信じた罰として何んな刑罰を自分に處せられても亡き妻のために喜んで受けやうと約束した。

リオナトが下した刑罰といふのは、娘が死んだ爲め自分の嗣ついでとなつた、ヒーロオに非常によく似てゐる従妹いとこと明朝結婚をせよと言ふのであつた。クラウデイオは老人に對して言つた嚴おこな約束を守つて、若しそれが黒人くろんぼであらうとも、その見知らぬ婦人と結婚しやうと斷言した。然しクラウデイオの心は悲しみに満ち、その夜はリオナトが建てたヒーロオの墓場で、悔恨の涙を流しつゝ泣き明した。

明くる朝にあつて、王子はクラウデイオを伴つて教會へ行つた。そこには既に老牧師やリオナトや姪達が第二の結婚式を擧げるために待ち受けてゐた。リオナトはクラウデイオに約束の花嫁を引合せた。花嫁はクラウデイオに見つかからない様に假

面をかぶつてゐた。クラウディオはこの面をかぶつた婦人に言つた。

「あなたの御手を下さい。この聖い牧師の前で、若しあなたが結婚して下さいますならば、私はあなたの夫となりませう。」

「私が生きて居りました時分には、あなたの先妻でありました」と言ひながらこの見知らぬ婦人は覆面を取つた。實は姪ではなくリオナトの本當の娘ヒーロオ自身であつた。死んだものと思ひ込んでゐたクラウディオが、何んか喜び驚いたかは大抵想像が出来るだらう。クラウディオは喜びの餘り夢ではないかと自分の眼を疑つた程であつた。王子もこれを見て同じ様に驚きながら叫んだ。

「この方がヒーロオさんですか、ヒーロオさんは死んだ筈ぢやありませんか。」

「然し殿下、誹謗が生きておる間、娘は死んでおりました。」とリオナトは言つた。

老牧師は式が終つてから此の奇蹟の様な話を説明しやうと約束して、式を始めやうとしてゐた時、ベネデイツクがそれを遮つて、自分も今一緒にベアトリスと結婚

したいと言ひ出した。ベアトリスはこの結婚に少し躊躇したので、ベネデイツクはヒーロオから聞いたのであるが、あなたが自分を非常に戀してゐるといふ事を楯にとつて要求した。そこで遂に愉快な説明をせなければならなくなつた。二人はお互に甘くかつがれて、戀してもゐないのに戀し合つてゐるのだと信じさせられてゐた事、そしてこの出鱈目の戯談から二人が本當の戀人になつてしまつた事などを知つたが、戯談から出来上つた二人の愛情は、この眞面目な説明でも破られない程に強いものになつてゐた。そしてベネデイツクは自分で結婚を申込んだからには、世界中がこれに反對して何と言はうとも、聞き入れまいと決心し、樂しげに此の戯談をとりあげてゐた。そしてベアトリスが自分を戀してその爲に死にかゝつてゐると聞いたから可愛想になつて、ベアトリスを救つてやる事にしたのだと言ふと、ベアトリスは自分は非常に説きつけられたので、半ばはベネデイツクを救ふつもりで承知したのであると抗議した。ベネデイツクが肺病にかゝつてゐたと言ふ事を聞いてゐ

たからである。そこで二人の才人達は仲直りをしてクラウディオとヒーロオとが結婚した後、夫婦になつた。話を終りまですれば、悪計を巧んだ弟のドン、チヨンは、逃げる途中で捕つてメシナへつれ戻された。この陰氣な不平家にとつては、自分の計畫が破れて、メシナで行はれる大宴會の楽しい様子を見る丈でも、充分に強い刑罰であつた。

お氣に召すまゝ

フランスが未だ封建時代で幾つかの小さな國々（公國とも呼ばれてゐた）に分れ諸侯が支配してゐた時分、その諸侯の一人に、自分の兄である罪のない侯爵の領地を奪ひ取り、その上追放してしまつた僭主がゐた。

さて、其領地から追放せられた公爵は、忠義な僅かばかりの家來をつれて、アーデンの森に隠れてゐた。そして人の良い公爵は、自分のために親ら進んで逃亡して

來た、親切な家來共と暮してゐたが、一方、悪い僭主は公爵や家來達の領地や收入を横領して益々富裕になつた。併し公爵達は馴れるに従つて次第に、以前の榮華な氣苦勞の多い宮廷の生活よりも、今の氣樂な暮しの方が餘程良い様に思はれ、一同は此處で英國に昔住んでゐたと言ふロビン、フツドのやうな生活をしてゐた。そして毎日宮廷から貴公子達が此の森へやつて來て、時の經つのも忘れて遊び戯れる様は、黄金時代に生きてゐた人の様にも思はれ、若者達は夏になると大きな森の木の下に寝轉んで、野鹿の面白い遊戯を見て暮した。そして此の若者達は、前からこの森に住んでゐたらしい斑のある鹿を好いてゐたので、鹿肉の御馳走を食べるために、無理に殺してしまふといふ様な事は、可愛想に思つてしなかつた。併し冬の寒い風が吹き初めて、自分の不幸な運命をひし／＼と身に感じさせる時なども、公爵はちつと我慢して言つた「予の體に吹きつける寒風は、予には眞の顧問官だ。風は追従をせず、予に有りの儘の状態を知らせて呉れる。風は鋭く身を刺すが、それで

もあの無道なものや恩知らずなほどよりはまだまだましぢや。人々は不仕合と言ふ事を厭ふ様だが、逆境からも滋味は味はれる。丁度高貴な薬に使ふ寶石が、毒ある醜い蝦蟆の頭から取られるやうなものぢや。斯う言ふ風に我慢強い公爵は自分が見る凡てのものから、立派な教訓を見出しその教訓に従つて生活し、皆で獵をして生物を殺したことを後悔した。公爵にとつては木々は皆物を言ひ、流るゝ小川は書物であり、石や岩が説法をする。萬事萬物皆良い教訓となつた。

此の追放された公爵には**ロザリンド**と呼ぶ一人娘があつた。僭主**フレデリック**公爵は兄公爵を追放した時にも、その娘丈は自分の娘**シリヤ**の友達にするために、宮廷に留めて置いた。此の二人の令嬢の間には、父親同士が不和になつても、その爲に少しも妨げられなかつた程堅い友情があつた。**シリヤ**は自分の父親が**ロザリンド**の父を追放した不義の償として、**ロザリンド**に出来る限りの親切を盡した。**ロザリンド**が父の追放された事や、自分がその邪な僭主に頼つてゐる事などを考へ

て、物思ひに沈む時には何時も、**シリヤ**は一生懸命になつて慰め勞はつた。

或日の事、**シリヤ**は平常の様に親切に**ロザリンド**に、「ね、お願ひだから、**ロザリンド**さん、陽氣におなりなさいね。」と言つてゐる時、一人の使がやつて来て、今相撲が始まりかけてゐるから、若しお前達が見度いと思ふなら、すぐ宮殿の前の廣場まで来るやうにこの公爵の傳言を傳へた。**シリヤ**は**ロザリンド**が喜ぶだらうと思つたので、見に行く事に決めた。

今でこそ相撲は田舎の道化者しかやらないだらうが、其の時分には宮廷等でもよくやつたもので、美しい貴婦人や王女達も觀覽したものである。やがて**シリヤ**と**ロザリンド**とがこの相撲を見に行つた。が、二人はこの勝負はきつと悲惨な光景に終るだらうと思つた。と言ふのは、長い間相撲の修業をやり、今迄にも澤山な人と勝負をして相手を殺した事のある、大きな強い男と、未だ年もゆかぬ相撲をあまりとつた事のない、青年とが、今や勝負を始めやうとしてゐたからである。そして見

物人も皆あんな男とやればきつと殺されてしまふだらうと思つてゐた。

公爵「シリヤとロザリンドとが來たのを見て言つた。「お、娘と姪か、そつと來てゐて相撲を見やうといふのか。面白くもなからうせ、あまり相手が不釣合すぎるから。氣の毒だからあの青年を説諭して止めさせたいものだ。お前たちからも説得して見たらよからう。」

二人は此の慈悲深い役目を爲すことを非常に喜んだ。最初シリヤが此の勝負を思ひ止まる様にと若者に言ひ、續いてロザリンドも同じ様に親切にすゝめた。二人が非常に情深く、今始めやうとしてゐる勝負の危険な事を諄々と説いたのだが、その優しい言葉に従はうとせず、若者は却つて斯んな立派な貴婦人達の眼の前で、自分の勇氣を示して名を挙げやうと決心した。若者は、二人が一層彼を哀れに思つた程靜かに町重にシリヤとロザリンドとの懇談を次のやうに言つて斷つた。「お姫さまがたの折角のお言葉に背くのは眞に相濟みませんが、どうかその美しい優しいお目

で、わたくしを後援なすつて、勝負させて見て下さいまし。負けた所が不幸者が、たかゝ一人恥辱を蒙るに過ぎないので。殺されたところで、いつそ死にたいと願つてゐた者が、只一人死ぬに止まるのです。友達に迷惑を掛ける事ありません。泣いてくれる友達でもないのですから。世間の損害にもなりません、てんで無財産なんですから。只世の中に生きてゐるといふ丈の男ですから、居なくなりやその空虚あきぐらゐは、すぐ優ましな人間で塞いで呉れます」

やがて相撲の勝負は始つた。シリヤは若者が怪我せない様に願つた。ロザリンドはそれ以上に願つてゐた。友達もなく、一層死に度いと若者が言つたので、ロザリンドは自分の身の上と同じ様に不幸である事を考へて、非常に若者に同情した。若者が相撲をとつてゐる間のロザリンドの心配は非常なもので、全く此の時戀に落ちてゐたと言つてもよい位であつた。

美しい貴婦人達が若者に親切を示したので、若者は急に元氣付き力が増して、

人間業わざとは思へない事を行ひ、遂に相手を見事に投げつけた。相手はしばらくは物も言はず身動きも出来なかつた程怪我してゐた。

フレデリック公爵は見知らぬ若者が非凡の勇氣と技倆を示したので非常に喜び自分の部下ぶかにしやうと思つて、その名前と家系けいとを尋ねた。

若者は名をオオランドと言ひ、ローランド、ド、ボイス卿の末子であると答へた。

オオランドの父、ローランド、ド、ボイス卿は數年前に死んだが、生きてゐた時は、前公爵の忠義な臣であり親友であつた。それで、フレデリックはオオランドが追放した兄の親友の子供である事を聞いて、勇敢な若者に對する好意は不快に變り非常に不機嫌でその場を立ち去つた。併し公爵は兄の友達の名を聞いた事は嫌だつたが、若者の勇氣には全く感心してゐたので、立去る時に、オオランドが誰か他の者の子供であれば良かつたと言つた。

ロザリンドは此の氣に入りの若者が、父の友達の子供であつたので非常に喜び、シリヤに言つた。「わたしの父はロザリンド、ド、ボイス卿を愛してゐました。あの若い人をあの方の息子さんだと知つてゐたら、私は泣いて迄も止めて、先刻さつきの様な冒険はさせなかつたでせうに。」

二人は若者の方へ歩み寄り、公爵が急に不快を示したので若者が當惑してゐたのを見て、氣を引き立てる様な親切な言葉を言つた。そしてロザリンドはもう歸らうとした時、勇敢な青年に何かもつと優しい事を言はふと振向いて、首飾を外しながら言つた。「あなた、どうぞこれを身につけてゐて下さい。今の様な不自由な身の上でなかつたなら、もつと價のある物を上げたいのですけれど。」

二人ぎりになつてから、ロザリンドはオオランドの事ばかりを話し續けたのでシリヤは従妹が美くしい若い力士に戀に落ちたのだと悟つた。

「どうして、さう急に戀に落ちてしまつたの。」

「父公爵はあの人のお父様を深く愛してゐましたもの。」

「だからあなたが其息子さんを愛するといふ理屈が立つんですか、そんな風に言へるなら、わたしはあの人を憎まなけりやならんわ。わたしの父があの人のお父さんを憎んでたんですもの。けれどもわたしオオランドーさんを憎まないわ」。

フレデリツクはローランド卿の子供を見て、兄の前公爵が貴族の友達を多く持つてゐた事等を思ひ出して不快になつてゐた。その上自分の姪が、淑徳並び高いと譽められ、またお父さんは佳い人だつた等と人々から同情されるのを常々から面白からず思つてゐたので、今や公爵の悪心はむら／＼と湧き起つた。フレデリツクは、シリヤとロザリンドとがオオランドオの話をしてゐた時、その室に這入つて行つて恐ろしい顔をしてロザリンドに、すぐ此宮殿を立去つて、亡命してゐる父の所へ行つてしまへと命令した。公爵はロザリンドを娘の爲にと思つたらばこそ止めて置いたのだとシリヤに言ひ、何んなにシリヤが辯護しても無駄だつた。

「引留めておいて下さいと私がお願いしたのぢやありませんでした。御自身の御慈悲でなすつた事です。其時分はわたくしは、あの方の価値を知るにはまだ餘りに少さ過ぎました。けれ共今は知つてゐます。私達は一緒に寝もし、起きもし、習ひもし、遊びもし、食へもしたのですもの、何うしても今は離れて暮すことは出来ません。」

「あいつはお前などの手に合ふ代物ぢやない。あいつのあの優しさ、あの堪忍強さが頗る愚民共の心を魅するのだ。で、奴等はいいつを同情する。あいつを辯護する等とはお前は馬鹿だ。お前はあいつがゐなくなれば、もつと立派にも美しくも見えるのだ。だから黙つてゐろ。一旦言ひ渡した嚴命はもう取消すことは出来ぬ。あいつは追放したのだ。」

シリヤは、父をぞれ丈説いても、ロザリンドを止める事が出来ないのを知つて、氣高くもロザリンドと一緒に往かうと決心した。そしてその晩父の宮殿を拔出し、家

來達と一緒に追放された公爵、即ち**ロザリンド**の父を探ねて、**アーデン**の森の方へ
と行つた。

二人が出發する前、**シリヤ**は今自分達が着てゐる様な立派な着物を着たまゝで若い女が旅行する事は危いと考へた。それで**シリヤ**は田舎娘の風をして自分達の身分が判らない様に仕やうと言ひ出した。**ロザリンド**はそれよりか一人が男の風をした方が、もつと安全だと言つたので二人はすぐさうする事に一致した。**ロザリンド**の方が脊が高かつたので、田舎の若者の服を着て、**シリヤ**は田舎娘の風をする事になつた。そして二人は兄と妹と言ふ事にして、**ロザリンド**は**ガニミード**と呼び、**シリヤ**は**アリエナ**と言ふ名を用ひる事に決めた。

斯う言ふ風に姿を變へ、お金や寶石を用意に身に附けて、二人の美しい令嬢達は、公爵の國境を越えてずつと遠くにある、**アーデン**の森へと長い旅路に上つた。

ロザリンド嬢は（今はもう**ガニミード**と呼ばなければならぬのだが）男の服を着たので男の様な勇氣まで身に備はつた様に思へた。**シリヤ**は、辛い思ひで幾里も幾里も行く間にも、**ロザリンド**に厚い友情を示したので、新らしく兄になつた**ロザリンド**も、快活な氣分を振ひ起して、優しい村娘**アリエナ**の大膽な兄である本當の**ガニミード**の様に、その心からの愛に報ひた。

二人が終に**アーデン**の森に來てからは、もう都合の良い旅宿も、途中で受けた便宜もなくなつてしまつた。道々常に陽氣に面白い話や楽しい言葉で妹を樂しませてゐた**ガニミード**も、今はお腹が減つたのと、長旅の疲れとで弱り果て、**アリエナ**に疲れ切つた事や、もう男の様な氣持に何うしてもなれないで、女のように泣き出した等と白狀した。**アリエナ**も亦、もう歩く事が出来ないと言ひ出した。然し**ガニミード**は又心を取り直して、男は女を弱いものとして慰め勞はるのがその義務であると思ひ出した。そして元氣よささうに妹に言つた。「さあ元氣におなりよ、**アリエナ**

私達のアーデンの森への旅行ももうすぐすむから。」

然しながら偽りの男らしさや附元氣は、さう長くは續かなかつた。現在アーデンの森には來てゐるが何處に父公爵が居られるのやら判らず、二人の冒險も或は哀れな終りを告げはしないかと思はれた。それはもう二人共全く生氣を失つて、飢の爲に死にさうだつたからである。けれ共幸な事には、二人が疲れ切つて何の希望もなく、殆んど死に類して草の上に座つてゐた時、一人の田舎男が丁度その路を通りかかつたので、ガニミードは元氣を出して、も一度男の様な調子で話し掛けた。「おい羊飼さん、ここか休息をさせて、物を食べさせて呉れる所が此の森の中にあるならどうか案内して貰ひ度いものだね。勿論代價を拂ふよ。好意でさうしてくれれば格別だが。ここにある若い娘が、私の妹だが旅の疲れでおそろしく弱つて、息も絶え絶えになつてゐるのだ。」その男は、自分は唯羊飼の召使に過ぎないのみか、主人の家も今では人手に渡らうとしてゐる位だから、何うせ食べられる物とてもないだら

うが、まあ一緒に來らるれば出来る丈の待遇はすると答へた。やつと救ひの希望が見え始めたのに元氣付いて、二人はその男について行つた。そしてガニミードとアリエナの二人はその羊飼の家と羊とを買ひ取り、その男を下男として召かゝへる事にした。斯んな事で幸にも小奇麗な小屋が手に入り、食料等も充分にあつたので、公爵が森の何の邊に住んでゐるか判る迄此處に住む事に決めた。

二人は旅の疲れを休めてゐる間に、此の新らしい生活が氣に入る様になつた。そして本當の羊飼男と羊飼女の様な氣にさへなつてゐたものゝ、時々自分は以前ロザリンドと言ふ娘であつて、父の友達ローランド卿の息子である勇敢なオオランドを非常に愛してゐた事などを思ひ出した。そして戀人のオオランドこそ、二人が辛い思ひをして通つて來たあの遠い路を距て、彼方にあるとは思つてゐたのだが又何だかやはりこのアーデンの森にゐるらしいと言ふ様な氣になり出した。全く不思議な事にはその通りになつた。

オオランドーはローランド、ド、ボイス卿の末子であつたが、父は死ぬる時（オオランドーは極く小さかつたので）長兄のオリバーに頼み、オオランドーに良い教育を施し、古い家名を汚さない程の者に育て上げよと託したのであつた。併しオリバーは餘り良い兄ではなかつた。父の遺言に従つて、弟を學校へも入れずに、家に置いて何も教へず放つて置いたが、オオランドーの性質や、心の高潔な所は立派な父によく似ており、少しも教育は受けなかつたが、注意深く育て上げた若者の様に怜悧に見えた。然るにオリバーは弟の立派な人格と威嚴のある風采とを嫉んで、遂に弟を殺さうと思ひ、そのため人々に色々弟を説きつけさせ、前にも言つた様に澤山の人を殺した事のある名高い力士と勝負をさせる事にしたのであつた。オオランドーが友達も何もない身の上だから、一層死んだ方がまじだと言つたのは、兄の冷酷を言つたのである。

悪い兄の陰謀を裏切つて弟が見事に勝つた時には、兄の嫉妬ねたみと悪心とは止まる所

を知らなかつた。そして遂にオオランドーが寝てゐる時にその室を焼いてしまはうと呪つた。この呪咀を亡き父の忠僕であつて、オオランドーがローランド卿に良く似てゐるので、非常に敬愛してゐた老人が立聞きした。老人は、オオランドーが公爵の宮殿から歸つて來るのを待ち受けてゐて、自分の若主人が非常な危険におゐるので、オオランドーを見るなり激しく焦りながら叫んだ。

「おゝ優しい若旦那様、おゝ大事の若様。おゝ先殿様のお形見さま。なせあなたはお徳があるんです。なせさう優しくつて、逞しくつて、勇敢であらつしやるんです。なせ物好きに公爵さまのお抱へ力士なんかを投げ倒す様な馬鹿な事をなさつたのです。あなたの手柄話はもうどうにこつちに聞えて居ります。」

オオランドーは一體何の事を言つてるのか判らなかつたので、何うしたのかと尋ねた。そこで老人は邪見な兄のオリバーが、弟の人望を嫉み、今又公爵の宮殿で勝負に勝つて得た名聲を聞いて、その晩に弟の室に火を放つて、殺してしまはうと計

つてゐるのであると物語つた。そして直ぐ様急いでこの危険から脱れる様にと勧めた。その上オオランドーは金を持つてゐない事を知つてゐたので、アダムは（良い老人の名であつた）少しばかりの貯金を持つて来て斯う言つた。

「私の手に金が五百クラウンあります。お父様に御奉公して、やつこの事で溜めた金です。齡がいつて足腰が立たなくなつた時の用意にと思つてゐた金です。これを持つてゐらつしやいませ。鴉をさへ不憫がりなさる神様、どうぞこの老人を安心させて下さい。……さ、こゝに金が御座ります。みんな差上げます、お伴をさせて下さいませ、齡はどつても未だ達者でございます。どんな御用だつて、仕事だつて若い者並に勤めますから」。

「おゝ、善良なお爺さん。昔の忠實な奉公人の生形見とはお前の事だ、お前は今の世には勿體ない人間だ。とにかく一緒に出掛けて、さうしてお前の若い時分の貯へがなくならないうちに、何とか生計の道を捜し當てやう」。

そこで忠僕と敬愛されてゐる主人とは一緒に出發した。二人は何の道を行けば好いのかも判らず彷徨ふ内、到々アーデンの森にやつて來た。そしてそこで二人は、ガニミードとアリエナが困つたと同じ様に食物がなくなつて難儀をした。二人は人の家でもないものかと探し廻つたが到々飢と疲れとで氣を失ひさうになつた。アダムは遂に「旦那様、もう逆も歩かれませんか。ひもじくて死んでしまひます。」と言ひながら其處に倒れてしまひ、其處を自分の墓にするつもりで、主人に別れを告げたオオランドーは老人がこんなに弱つたのを見て、自分の腕に抱き上げ、快ささうな木蔭につれて行つた。「元氣をお出しよ、アダム爺さん、死ぬなんぞと言ふものぢやないよ。」

オオランドーは何か食物はないかと探しに行き、偶然にも公爵達が住んでゐる森の方へ出た。その時公爵は友達等と一緒に食事を始めやうとしてゐる所で、公爵は天蓋のそれではなく、或る茂つた大樹の葉蔭の草の上に座つてゐた。

オオランドーは飢のために自暴自棄になつて、劍を抜き武力を以て食物を取らうと決心した。「ま、待て。もう食ふ事はならぬぞ。俺にその食物が要るんだから。」と叫んだ。公爵は窮迫のために左様な不敵の行爲をするのか、それとも又まるで作法を辨へて居らぬのかと尋ねた。そこでオオランドーは飢え死にさうなのであると答へると、公爵は席に就いて食べよと言つた。オオランドーは公爵がそんなに優しく言ふのを聞いて、自分の劍を収め無作法にも食つてはならぬなど、嚇した事を恥ぢ赤面しながら言つた。

「失禮してまことに済みませんでした。實は、斯ふいふ荒れ果てた森の中の事ですから、萬事が野蠻だらうと思つて、わざと高飛車に出て見たのでした。斯様な森の中の小暗い木蔭で時の過つのも構はないでお暮しのあなた方にも、幸福な日はありましたか。あなた方は嘗ては都にもお住みで、教會堂へ人を集める鐘の音をも聞かれ、歴々の盛宴にも招かれ、あなた方の目蓋から流れる涙をも拭ひなすつた事があ

つて、慈悲憐愍の何たるかをも心得ておいでなさるのなら、私は深く只今の無禮を慚入ります。」

「いかにも、お前さんの言ふ通り、私達にも榮華な時代はあつた。今でこそこの荒れ果てた森に住んではゐるが、昔は都會にも住み、又聖い鐘の音が教會堂へ人を寄せるのを聞き、又歴々の宴會へも招かれ、慈悲が醸した涙を拭つたこともあつた。だから席に就いて何なりと、欲しいと思ふものを取つておあがりなさい。」

「實は一人の可哀想な爺がゐます。全くの忠義な心から疲れた足を引ずつて、わたくしに従つて來た奴です。まづ、彼に——老いと飢との二つの苦みで死にかけてゐる彼に——食はせた上でなければ、わたくしは一口だつていたゞきませぬ。」

「ぢや探して來なさい、あなた方が歸つて來なされる迄は、私達は何にも手をつけずに待つてゐよう。」と公爵は答へた。オオランドーは、食物を喰べさす爲に牡鹿が仔を探し廻りでもする様に探しに行き、すぐアダムを腕に抱いて歸つて來た。公爵は

「さあさ、其爺さんをこゝへおろして、二人ともおあがりなさい。」と言ひ、皆で老人に物を喰べさせ氣を引き立てたので、老人も氣を取戻して、元の様に丈夫になり元氣付いた。

公爵はオオランドーの身分を尋ねた。そしてそれが自分の親友ローランド卿の末子である事を知り、自分の部下となし、オオランドーと忠僕とは公爵と一緒に森で暮す事となつた。

オオランドーが森へ来たのは、ガニミードとアリエナとが羊飼の小舎に来て（前にも言つた様に）その小屋を買つてから數日と経たない頃であつた。

ガニミードとアリエナとは森の木々にロザリンドの名が刻み付けられ、そこにロザリンドに宛てた戀の小唄が結んであるのを見付けて非常に驚いた。そしてこれは一體何うした事だらうと森を歩いてゐる時に、二人は偶然にもオオランドーに出會ひ、ロザリンドの與へた首飾をオオランドーが今も尙首に掛けてゐるのを見た。

オオランドーはこのガニミードが彼の氣高い謙遜と寵愛とによつて、自分の心を捕へ、その爲に自分が終日その名を木に刻み付け、その美しくさを讃へる戀唄を作つてゐる、あの美しいロザリンドであるとは夢にも知らなかつた。が、この美しい羊飼の若者の優雅な様子が氣に入つたので、話をし始めた。オオランドーはガニミードが愛するロザリンドに良く似てゐると思つたが、この若者にはあの令嬢の様な威嚴のある舉措が少しも見へなかつた。ガニミードは幼い時分に、男の子や殿方の間で常に見てゐた様な、無遠慮な態度を真似て、随分意地悪や戯談をませて或戀人の話をオオランドーに聞かせたからである。「この森の中に誰かゝゐて、若木の幹を削つて「ロザリンド」と言ふ名を刻み付ける男がゐます。山樞に戀歌を書いて懸けて置いたり、木莓に哀れつばい文句をぶらさげたりします。どれもこれもロザリンドといふ女を賞讃してゐます。あんな事をする男に出會つたら、一番意見してやらうと思ふんです。戀わづらひを治す爲にね。」

オオランドーは自分が、あなたが今話してゐるその男であると白状し、ガニミードにその意見とやらを言つて呉れと頼んだが、ガニミードが與へる治療法といふのはオオランドーが毎日、ガニミードとその妹アリエナとが住んでゐる小屋へ來なければならぬと言ふのであつた。そして言つた。

「それから、私がロザリンドの様な姿になるから、あなたもロザリンドにすると同じ様な風に私を口説かなけりやいけない。それで私は氣まぐれな婦人達はその戀人にする様な勝手放題な事をやる。遂にはあなたは、それで、もう戀なんぞは馬鹿らしくなるやうになるんです。それが私の戀の治療法なんです」。

オオランドーは此の治療法を大して信用はしなかつたが、毎日ガニミードの小屋へ來て、戀人遊びをしやうと約束した。そして毎日オオランドーはガニミードとアリエナを訪問し、羊飼のガニミードをロザリンドと呼んだ。そして毎日若い人達が婦人と話す時に好んで使ふ、美しい言葉や諂ふ様な話をした。併しオオランドー

がロザリンドに對する戀わづらひを、少しでも良くした様な兆候は見えなかつた。

オオランドーは（ガニミードこそ本當のロザリンドであるとは夢にも知らなかつたので）此んな事は皆根のない遊戯だとは思つてゐたけれど、調子に乗つて思ふ存分に自分の心にある愛情の凡てを語つた。それで、此の立派な戀の言葉が戀してゐる當人に語られてゐると言ふ、秘密を知つて一人悦んでゐたガニミードも、自分の空想が滿されるのでオオランドーと同じやうに喜んだ。

斯んな風に若い人達は楽しい月日を送つた。人の良いアリエナは、そんな風に、ガニミードが愉快にしてゐるのを見て、馬鹿氣た戀遊びを勝手に續けさせて置き、オオランドーから聞いて判つた森の中の公爵の住家へ行つて、早くロザリンドとしてその父に面會するやうには獎めなかつた。或る日ガニミードは公爵に出會つた。そしてしばらく話をした。その時公爵はガニミードにお前の先祖は誰だと尋ねた。ガニミードはあなたと同じ様な好い身分だと言つたので、公爵は微笑した。この羊飼



が公爵の家の者だとは思つてもゐなかつたから。ガニミードは自分の父が、丈夫で又幸福さうに見えたので満足して、凡てを打明けるのは二三日延ばす事にした。

或る朝オオランドーは、ガニミードを訪問しやうとして行く途中で、一人の男が地の上に倒れてゐるのを見付けた。その首には大きな青い蛇が巻きついてゐたがオオランドーが近づくのを見て草叢の方へ逃げ込んでしまつた。オオランドーが近寄つて見ると又そこには雌獅子が蹲うつまつて、頭を地につけて獲物を狙ふ猫の様に、眠つてる男が起きるのを待つてゐた。(獅子は眠つたり死んだりしてゐる者は決して食はないと言ふ話である) 丁度オオランドーは神様のおぼしめしで、蛇と獅子との危険にゐる男を助ける爲に送られたかの様であつた。而してオオランドーがこの二重の危険の間に眠つてゐた男の顔を見た時、それが自分を酷く使ひ、その上火を放つて焼殺さうとまでした兄のオリバーであるのに氣が付いた。それでオオランドーはよつほどこの儘兄を飢えた獅子の餌食に残して置かうかとも考へたが、兄弟の愛情

と彼の良い性質とが兄に對する最初の怒りよりも強くなり、遂に劍を抜いて獅子と戦つて殺し毒蛇と獅子との危険から兄の命を救つた。がオオランドーは獅子と闘つてゐる間にその鋭い爪で、片腕を引裂かれた。

オオランドーが獅子と闘つておる最中にオリバーは眼を醒し自分があんなに酷い目にあはした弟のオオランドーが、自分の命を投出してまで、兄を救ふ爲に猛獸と戦つてゐるのを見て、恥と後悔の念に攻められ。今までの自分の無道な行を悔悟し、涙を流して今迄になした罪惡を許して呉れる様にと願つた。オオランドーは兄がそんなに悔ひてゐるのを見て、その場で之を許し互に抱き合つた其の時からオリバーは本當の兄弟らしい愛情を以つて、オオランドーを愛した。オリバーは實は弟を殺さうと思つて此の森へやつて來たのであつた。

オオランドーの腕の傷からは澤山な血が出て、ガニミードの所迄行く丈の力もなくなつたので、兄にガニミードの所まで行つて——その人を自分は戯れにロザリン

ドと呼んでゐると言つた——今迄の出来事を告げるやうにたのんだ。

オリバーは小屋へ行つて、ガニミードとアリエナとにオオランドーが自分の命を救つて呉れた次第を話した。そして勇敢なオオランドーの行爲や、天の助けで自分が救はれた事などを語り終つてから、二人に自分はオオランドーの兄であつて、前には弟を酷い目に合せたが、今はもう仲直りした事をも語つた。

オリバーが真心から自分の罪を悔い悲しんだのを見て心の優しいアリエナは非常に深い印象を受けた。そしてその瞬間からその男を戀する様になつた。そしてオリバーも亦、自分が話した自分の罪のための胸の苦しみに同情して呉れる娘を見て、急にその女を戀し出した。併しアリエナとオリバーとの心に戀がしのび寄つてゐる間にも、二人はガニミードの世話をするために忙がしかつた。其譯はガニミードはオオランドーが恐ろしい危険に入つて、獅子の爲に傷けられた事を聞いて、氣絶したのである。それでも氣を取り戻した時には自分がロザリンドになつたつもりで居

るものだから、氣絶の眞似をしたのだと胡麻化してガニミードは言つた。「弟さんのオオランドーに言つて下さい、仲々巧く氣絶の眞似をしたつてね。」併しオリバーはガニミードの顔色が餘り青白いのを見て本當に氣絶したのだと思ひ、又若い男にしては餘り弱過ぎるのを不思議がりながら言つた。「全く眞似なのなら、うんと勇氣を出して、男になる眞似をなさいよ。」さうしてゐますの、けれども、實際、女に生れ附いた方が當然だつたのでせう」とガニミードは正直に答へた。

オリバーは弟の所へ長い間歸つて來なかつた。そして話さねばならぬ事をうんと持つて歸つて來た。兄オリバーはガニミードがオオランドーの負傷を聞いて氣絶した事の外に、自分が何うして美しい羊飼の娘アリエナと戀に落ちたか。そして始めて會つたのにも拘らず、自分の求婚を喜んで承知して呉れた事をも話したのである。又弟に、既に決定した事のように自分はアリエナと結婚して、羊飼となり此處に止まらねばならぬから、國にある財産や家は皆お前にやる事に決めたと語つた。

「賛成します。明日にも式をお挙げなさい。其席へ公爵さんを始め御家来一同を招きませう。早く行つてアリエナさんにその準備をおさせなさい。アリエナは今獨り居ります、あれあそこへ、兄さんが來ましたから。」

オリバーはアリエナの所へ行つた。ガニミードは友達の病氣を見舞ひに來たのであつた。

オオランドーとガニミードが、オリバーとアリエナとの間に急に出來上つた戀の話をし合つてゐた時、オオランドーは自分の兄に明日あの羊飼娘と結婚する様に奨めたと話し、その上何んなにか自分がその同じ日にロザリンドと結婚し度いか知れないと附加へた。

ガニミードはその結婚を非常に好いと認めた。若しオオランドーが、口で言つておると同じ様にロザリンドを心でも愛してゐるのなら、その願を叶はしてやると言つた。ガニミードは明日になれば、本當のロザリンドを、つれて來るやうにしやう

と言つた。勿論ロザリンドもオオランドーとの結婚を喜んでゐるから。

實際から言へば全くあり得ない此の話も、ガニミードが本當のロザリンドであるのだから、何の苦もなく出來る譯であつたが、ガニミードは有名な魔法使であつた伯父さんから習つたと言ふ魔法の力を借りて、それをやつて見るのだと言つて置いた。

戀に夢中のオオランドーは、自分が聞いた事を、半ば信じ半ば疑つてゐたので、ガニミードに正氣で言つてるのかと尋ねた。ガニミードは答へた「命にかけて眞面目です。ですから晴着を着て、公爵やお友達を結婚式にお招きなさい。明日は、あなたさへロザリンドさんと結婚する氣なら、きつとロザリンドさんも來るに決つてをりますから。」

オリバーはアリエナの承諾を得てゐたので、翌朝オリバーと、アリエナとは共に公爵の所へ行つた。オオランドーも勿論一緒であつた。

二組の結婚式をするために一同は集つてゐたのであるのに、其處には花嫁が一人しか来てゐないので、皆は不思議がつたり、憶測したりしてゐた。そして殆ど大低の者はガニミードがオオランドーを擲擄つてゐるのだらうと思つてゐた。

公爵は斯んな奇體な方法でつれて來られると言ふ小娘が、愛嬢ロザリンドであると聞いて、オオランドーに、あの羊飼の男が約束した様に、本當にやれると信ずるか何うかと尋ねた。オオランドーが何う考へて好いのだか判りませぬと答へた時、ガニミードが這入つて來て、公爵に若しお嬢さんを私がつれて來たら、あなたはオオランドーと結婚する事を許しますかと尋ねた。

「さやう、姫と共にやる可き王國が、たとへ幾つあらうとも。」と王は答へた。

ガニミードは又オオランドーに言つた。

「それからあなたは、必ずお姫さんと結婚するとお言ひですな。私が連れてさへ來れば。」

「確にします、たとへ私が王國を幾つ貰つて、その國王になつたとしても。」

ガニミードとアリエナは一緒に外へ出た。ガニミードは自分の男の服を脱ぎ棄て又元の女の服を着て魔法でも何でもなしにすぐにロザリンドになつた。アリエナも田舎娘の服を脱いで元の高價な着物を着けて、何の苦もなしにシリヤに變つてしまつた。

二人が座を外してゐる間に、公爵はオオランドーに、羊飼のガニミードが自分の娘に良く似てゐると言つた。オオランドーも亦、前からそう思つてゐたと告げた。

皆が何うなる事だらうと心配する間もなく、ロザリンドとシリヤとが元の貴婦人の姿になつて這入つて來た。そして其時は魔法を使つたのだ等とは言はずに。ロザリンドは父の足下にひれ伏して祝福を願つた。一座の人々には姫がそんなに急に現れたと言ふ事は、全く魔法でもつてやつたとより思へない程不思議な事であつた。併しロザリンドはすぐ父の足下より立上つて、自分が追放された事から、森の中で、

従妹のシリヤを妹の様にして、羊飼に化けて暮してゐた事まですつかり話した。

公爵は既に與へた許可を是認し、茲にオオランドとロザリンド。又オリバーとシリヤとは一所に結婚の式を挙げた。そして此の森の中では、斯様な場合に常に宮殿でやつた様な行列や、華麗な式を行ふ事は出来なかつたけれども、こんなに楽しい結婚の日はこれ迄に嘗て無かつた。そして美しい木の涼しい蔭に座つて、皆が楽しく御馳走を喰べてゐた時であつた。丁度この善良な公爵と眞の戀人達の幸福を、何一つ不足のない様にするかと思はれる程、意外な使者が公爵の舊領地から遣つて來て、其の吉報を齎らした。

弟の僭主は娘のシリヤが逃げた事を非常に怒り、又毎日／＼重要な地位にある人々が、追放された正しい公爵の味方となるために、アーデンの森へ行く事を聞いて兄がその逆境に於ても尙人々から尊敬せられるのを非常に嫉み、兄を捕へ、その家來と一緒に切り殺さうと思つて、自ら大軍の先頭に立ち森を目がけて進軍した。が

不思議な神の攝理に依つて、この悪心の弟は途中で改心をしてしまつた。夫れは弟の公爵が、丁度この森の端れ迄來た時、仙人の様な一人の年を取つた隱者に出會つた。公爵はその老人と長い間話をしてゐる間に、到々すつかり自分の悪い計畫を思ひ止まつてしまつて、其の後は心より後悔して、自分の邪な事に依つて得た領土を棄て、残りの生涯を僧院で暮さうと決心した。そしてこの決心と同時に、何よりも先づ兄へ自分が長い間横領してゐた領土を返し、又兄の家來達の領地や扶持をも元通りに戻すと言ふ使者を遣はしたのであつた。

此の吉報は——思ひ掛けなかつたので、又それ丈皆に喜ばれたのであるが——丁度良い時に來て王女達の結婚の宴樂と歡樂とを一層高めた。シリヤは従姉のロザリンドに、父君の得られた幸福を祝し、又自分の父が領地を返還したため、自分ももう嗣ではなくなつたけれ共、ロザリンドが新に嗣となつた事を心から喜び祝つた。此の二人の従姉妹達の友愛はかくまで立派であつて、嫉みや羨みなどは露ほどもな

かつた。

今や公爵には、放浪生活の間自分と共に暮した忠義な家來達に報酬を與へる時が来た。家來達も亦逆境を忍耐し辛捧して来た甲斐あつて遂に平和と榮譽との内に、正しい公爵の宮殿に歸る事が出来るのを此上もなく喜んだ。

ベロナの二紳士

ベロナの市にバレンタインとプロチウスと言ふ二人の若い紳士が住んでゐた。二人の間には何物に依つても妨げられない堅固な友情がもう長い間續いて居り、二人は共に學び共に研究し又暇な時には常に一緒に遊んでゐた。但し唯一の例外はプロチウスが自分の戀してゐる婦人を訪ねる時のみでつた。彼が此の戀人への訪問と美しいジュリアに對する熱情と丈が、二人が一致し得ない唯一の話題であつた。また戀の經驗を持たぬバレンタインは、時々友達がジュリアの事ばかりを話し續けるの

であき／＼して、時にはプロチウスをからかつておどけまじりに、熱狂的な戀を嘲弄したり、又プロチウスの様にそんなに不安な希望や恐怖を抱いた戀人になるよりも、現在バレンタインの送つてゐるやうな自由で幸福な生活を喜んで居たから、そんな馬鹿らしい戀なぞを考へる頭を持つてゐないと言へ断言した。

ある朝バレンタインはプロチウスの所へやつて来て僕はミランへ行くから暫く別れなければならぬと話した。友達と別れるのを好まなかつたプロチウスは色々無理屈を言つて彼のミラン行を思ひ止まらせやうとしたが、「彼は無理に止めてくれ給ふな、プロチウス君。僕はのらくら者の様に故國にゐて青年時代をなまけつふしたくない。郷土に執着する青年に限つて郷土らしい才智しかない。若し君の愛情が君の尊敬してゐる美しいジュリアの姿に縛られてゐないのなら、僕と一緒に外國に行つて世界の驚異を見物するやうにすゝめるんだが、併し君はジュリアさんの戀人だからその戀を續け給へ。そして君の戀が益々佳境に進む事を望む」と言つた。

二人は互に變らない友情を以て別れた。

「バレンタイン君、では御壯健で。旅行中に何か特に注意に價する様な珍らしい物を見た時には、僕も一緒に来ておればよかつたのにと、僕の事を思ひ出して下さい」とプロチウスは言つた。

バレンタインは其の日すぐにミランへ出發した。プロチウスは友の出發した後、机に向つてジュリアへの手紙を書いて、それを自分の戀人に渡して呉れる様にとジュリアの召使ルセツタに頼んだ。

プロチウスが愛してゐると同じやうにジュリアもプロチウスを愛しては居たが、氣位の高い負けぬ氣の女だつたので、さう易々と戀人に従ふ様では處女の威嚴を損するさへ考へて居た。そこで男の愛情に對しては冷淡な風を裝ひ、いつもプロチウスに對しては少なからず不安を抱かせてゐた。

ルセツタがジュリアにプロチウスからの手紙を差出した時、ジュリアは受取らう

ともせないで、下女が左様な手紙などを受取つたのを叱り、室を立ち去れと命じた。とは云へジュリアは手紙の中に何んな事が書いてあるのか見度くてならず、女中を再び呼び戻し、そしてルセツタが其室に這入ると「今何時か」と外のことを尋ねた。主人が時間よりも手紙の方を餘程知りたがつてゐる事を良く承知してゐたルセツタは其間には答へないで又前の手紙を差出した。ジュリアは女中が自分が本當に望んでゐる事を知つてゐる様な舉動をしたのが癢に觸り、手紙をすたく／＼に引きさいて床の上に投げつけ、又も女中に此所から出て行けと命じた。そしてルセツタが、室を出て行きがけに手紙の破片を拾はうとしたので、それを持つて行かれては大變だと思つて、怒つた風をして言つた。

「出てお行き、さつさと出てお行き。紙片など放つて置けば好いちやないか。お前は私を怒らさうと思つてそんなものを弄いぢくつてるのだね」

ジュリアはあとで、ちぎれた紙片を出来るだけうまくつなぎ合せ、初めて「戀に

傷つきたる**プロチウス**」といふ言葉を綴り出した。すたすたに破れた、――或は**ジュリア**の言ふやうに、傷いた（この表現は「戀に傷いた**プロチウス**」といふ句から思いついたのである）破片から、あれやこれやと苦心して綴り合せた戀の言葉を惜しみながら、**ジュリア**はこの戀の言葉に向つて、お前の傷が治るまでは自分の胸を寢床代りにして抱いてゐてあげやう。又引裂いた償ひとして、その破片にもキツスしてあげやうと真心から言つた。

ジュリアはこんな風に優しい女らしさと子供らしさで話し續けてはゐたが、手紙は何うしても元通りにつき合はせ得なかつた。自分が短氣にもあんなやさしい戀文を裂いてしまつた事を悔ひ、今迄に書いた事がない程心の籠つた手紙を**プロチウス**に送つた。

プロチウスはこんなに愛の籠つた返事を受取つたので非常に喜びこれを読みながら叫んだ「楽しい戀、楽しい水莖の跡、楽しい人生！」と夢中になつて讀んでゐる

最中に父親がやつて来て「おい〜。誰から來た手紙を讀んでるのです」と老紳士が尋ねた。

「お父様、友人の**バレンティン**が**ミラン**から寄こしたのです」

その手紙を「貸して御覽、何んな報知しらせが書いてあるか讀みたいから」

「いえ、別に何も書いてありやしません、お父さま。唯友達が**ミラン**の公爵に非常に愛されてゐて、毎日寵愛を蒙つてゐると言ふ事と。君が一緒にゐてこの幸福を分つ事が出来ればよいのにと書いてある丈です」と非常に驚きながら言つた。

「で、お前はそれを何う思つてゐるのか」

「お父さまの御考へ次第です。友達の考へ次第にはなれませんから」

プロチウスの父は丁度今その事に就て友達と話し合つてゐた所であつた。その友達は**プロチウス**の父が何故に自分の子を、他人の様に外國へやつて修業をさせないのかを訝かり。

「或人は自分の子の運命を試すために戦争にもやつたり、或は無入島發見に遠方へ行き、外國の大學へ勉強に行く人もある。それに**プロチウス**には**バレンタイン**の様な佳い友人もあり、今は**ミラン**の公爵の宮廷へ呼ばれて行つて居る。あなたの御子さんは何んな事でも出來ます。若い間に旅をさせてあげなけりや、年をとつてから本當に後悔なさるでせうよ」と勵められたのであつた。

プロチウスの父はこの友達の忠告を最もだと思つてゐた。それに**バレンタイン**が**プロチウス**に「一緒にゐてこの幸福を分つ事が出來れば良いのに」と言つてゐるのを幸、すぐに息子を**ミラン**へやらうと決心した。勿論この俄かな決心に就ては何の理由をも**プロチウス**に告げなかつた。この勝氣な老紳士はいつでも何の理由も言はないで息子に命令するのが習慣であつた。――

「予も**バレンタイン**が望む様に仕た方が佳いと思ふ」と言ひ、そして**プロチウス**

が驚いたのを見て、「予がこんなに急に、お前をしばらく**ミラン**公爵の宮廷へ送らうと決心した事を驚いてはいけない。予が思ふ通りを予がする丈の事さ。明日迄に出發の用意をしろ。予は既に決めてしまつたのだから少しも猶豫はならぬぞ」と附け加へた

プロチウスは自分の父に逆らつても駄目である事を良く知つてゐたので、意見をのべたり、口論したりなどはせなかつたが、自分が**ジュリア**の手紙に就て父に嘘を言つた事から戀人と別れなければならぬ様な悲しい結果になつた事を後悔した。

ジュリアは今、**プロチウス**が長い間、外國へ行つてしまふと言ふ事を聞いては、もう冷淡な風を装ふてゐる事が出來ず、互に心や戀の變らぬ誓をして、悲しいく別れを告げ、互に其の印に永久に身を離さぬと約束して、指輪を取り交した。**プロチウス**は斯んなにつらい別れをして、**ミラン**へ旅立ち其所で友達の**バレンタイン**に出會つた。

プロチウスが、父に出鱈目な想像のまゝを言つた通りに、バレンタインはミラン公爵から非常な寵愛を受けて居り、その上に夢にも豫想しなかつた様な事件が起つてゐた。と言ふのはバレンタインは今日迄あんなに誇りにしてゐた自由を棄て、プロチウスと同じ様に激しい戀の奴隷となつてゐたのである。

バレンタインに、こんな不思議な變化をさした相手は、シルビアといふ、ミラン公爵の娘で、シルビアも亦バレンタインを戀してゐた。併し二人は自分達の戀を公爵には秘密にしてゐた。夫れは公爵がバレンタインに非常な好意を示し、毎日の様に自分の宮殿へ招待などしてはゐたが、自分の娘をツリオと言ふ侍従と結婚させやうと目論んでゐたからである。併しシルビアはバレンタインの様な立派な考へと優れた性質を持つてゐないツリオを嫌つて居た。

或日二人の戀の競争者、ツリオとバレンタインとが一度にシルビアを訪れ、バレンタインはツリオの言ふ事を一々擧げ足を取つて嘲弄の種とし、シルビアを嬉せて

ゐた。丁度その時公爵が室に這入つて来て、バレンタインに友達のプロチウスが到着したと告げた。

「私は友人が此處に来る事をどんなに望んでゐたか知れなかつたのです」とバレンタインはプロチウスの事を口を極めて褒めた「公爵閣下、私は懶けてばかり居りましたけれど、私の友達是非常な勉強家で、人格と言ひ性質と言ひ、又紳士らしい紳士の美德を備へてゐる點と言ひ何一つ申し分は御座いませぬ。」

「ではその人の徳に相應する様に良く歓迎しなさい。シルビア、私はお前に言つてゐるのだよ。それからツリオさん貴君も。併しバレンタイン君には別にさういふ必要もあるない」此時プロチウスが這入つて来た。バレンタインは「お姫さま、私と同様あなたの下僕としてお待遇下さいませ」と言つて友達をシルビアに紹介した。

バレンタインとプロチウスが退出して二人ぎりになつた時、バレンタインは尋ねた。「國では皆變りはありませんか。君の愛人は丈夫ですか。戀は益々順調に行き

ましたか」

「僕の戀の話はいつも君を退屈させる様だし、君は又戀の話などあまり好まれな
い事を知つておるからよしませう」

「あゝプロチウス君。僕はもうあんな生活を變へてしまひました。今では戀を呪
つた事を後悔してゐます。戀を輕蔑した仕返しに戀が僕の眠つてゐた眼から眠を追
ひ出しました。おゝプロチウス君！戀は力強い王様です。戀は僕を謙遜にしました。
僕は戀程の悩みも此の世になれば、又戀程の悦びも此の地上にはないと白状しま
す。戀の話でなければ嫌になりました。僕は今三度の食事も眠りも、凡て戀の名の
爲めにする事さへ出来ません」

戀はバレンタインの性質を一變したことを知つたのは友人プロチウスにとつて大
勝利であつた。併しプロチウスは既にバレンタインと「友達」ではなかつた。二人が
語り合つてゐた時に（さうだ、二人がバレンタインの心の内に變化を起させたと語

りあつてゐた時でさへ）その同じ全能の戀の神が、プロチウスの心にも働き出したか
らである。今迄は眞の戀人として、又完全な友人として模範とも言はるべきプロチ
ウスが、ほんの暫時、シルビアと會つただけで、既に虚偽の友となり、不信の戀人
となつてしまつたのである。まことにプロチウスがシルビアを一眼見た時から、ジ
ュリアに對する戀は全く夢の様に消え去り、バレンタインとの長い間の友情だも尙
ほ、シルビアに對する愛情を止める丈の力がなかつたのである。生れ付き性質の良
い人が、不正直になつた時にはいつもさうであるが、プロチウスはジュリアを振り
捨て、バレンタインの競争者にならうと決心する迄には、少なからず躊躇したとは
云へ、彼は遂に義務の觀念を打ち捨て、殆んど悔恨の念なしに、新らしい不幸な
情熱に身を委せてしまつたのであつた。

バレンタインはプロチウスを信用して自分の戀の一伍一什をすつかり打明けた。
どんなに注意深く二人の戀を父公爵に隠して居るかと言ふ事や、公爵から何うして

も許しを得る望がないので、遂にシルビアを説いて今晚宮殿から逃げ出させて、マ
ンツアへ駈落ちしやうとしてゐる事などを話し、夕暮になり次第宮殿の窓からシル
ビアをつれ出す時に使ふと言ふ繩梯子をもプロチウスに見せた。

是は全く信せられぬやうな話だが、此の大切な秘密を友達から詳細に語り聞かさ
れてから、プロチウスは公爵の所に行つて、今の秘密をすつかり話してしまはうと
決心したのである。

この虚偽の友、プロチウスは、公爵の氣を引く爲めにあらゆる技巧をもつて、そ
の話を飾り、今述べやうとする事は友情としては隠して置かねばならぬのであるが
公爵から示された、御厚意に黙視するに忍びないので、又この御恩寵を蒙つた義務
が、私をして御知らせさせるのであつて、世間的な利益のためにするのでないと前
提して、繩梯子の事や、バレンティンがどういふ風にしてその繩梯子を長い外套の
下に隠すかといふ事まで、バレンティンが話した一伍一什を公爵に物語つた。

公爵はプロチウスを驚くべき完全無缺な人だと思ひ、そして不正な行動を隠して
置くよりも、むしろ友達の計畫を發いた方が好いと思つた事を、非常に賞讃した上
此の秘密を誰から聞いたといふ事は決してバレンティンに知らせないで、自然とバ
レンティン自身にその計畫を曝露させる様な方法を取らうと約束した。そのため公
爵はその晩、バレンティンが来るのを待ち受けてゐた。間もなくバレンティンが宮
殿の方へ急いでやつて来るのが見えた。そして何か外套の下に包んでゐるものがあ
る様に見えたので、公爵は繩梯子に相違ないと思つた。

公爵はバレンティンを呼び止めた「そんなに急いで何所へ行くのです、バレンタ
イン君」「公爵閣下。外でも御座いませぬ。あそこに使の者が待つて居りますので、
友達への手紙を渡しに行く所で御座います」と云つた。バレンティンの此の嘘も、
プロチウスが父に言つた嘘と同様に成功せなかつた。

「何か重大な事でもあるのですか」

「いいえ別に。私が達者で、閣下の宮殿で非常に幸福に暮してゐる事を父に告げて呉れど書いてある丈です」「ちや別に大して急がなくても好い。暫時つき合つてくれ給へ。私に關係ある事件で一寸君に相談したい事があるから」と言つて、公爵は巧みにバレンタインにその秘密を引き出す手懸りの話をし出した。自分は娘をツリオと結婚させやうと思つてゐたが、娘が片意地で、父の命に少しも従はないと語り「今は私もあれが私の娘であるとも考へず、又私があれの父であるとも考へてゐないので。君に云ふがあの娘の高慢さが、あれに對する私の愛を取り去つてしまひました。私の老後は娘の孝養心に任さうと思つてゐたが、私は此度妻を娶つて、あの娘は娘の好きな男に呉れてやらうと決心したのです。しかし私の財産は何もやらないから、自分の美しくしさを持參金にすりやいゝんだと思つてゐます」と言つた。

バレンタインは一體何うなる事かと怪しみながら答へた「で結局、閣下は私に何うせよとおつしやるのです」

「それでだ。私は美しくして内氣で、年寄の繰言をうるさからない様な人と結婚したいのだ。その上求婚の風も若い時分とは大分變つてゐるやうだから、何うして女を口説いたら宜いかと言ふ事を君から教へてもらひ度いのだ。」

バレンタインは當時の青年が練習してゐる求婚方法の概略を話し、美しい婦人の愛を贏ち得やうと思ふ時には、何う言ふ種類の贈物をするのがいゝとか、度々訪問せなければならぬなどと教へた。

公爵は自分が贈つた品物を婦人は受けつけなかつたこと、又父親が嚴重にしてゐるので、晝間はその娘には誰も近づぐ事が出来ないのだと言つた。

「ちや夜訪ねれば宜いぢやありませんか」

「處が夜は娘の室の鍵が堅くかゝつてゐるのだ」と公爵はうまく話を要點まで持つて來た。

バレンタインは何の氣なしに、夜になつてから繩梯子を使つて婦人の窓迄のぼれ

ば宜しい、又それに使ふのなら一つ佳いものを持つて来ましようと言ひ、最後に繩梯子を隠す爲には自分が今着てゐる様な長い外套を着ればよろしいと告げた。「ちやその外套を貸して下さい」と公爵は長い話を拵えてやつとの事で外套を脱がせる所までこぎ着け、バレンタインの外套を掴んで、それを脱がせ、繩梯子ばかりでなくシルビアからの手紙をも見付け、それを直ぐ開いて讀んだ。手紙の中には二人の墮落の計畫が詳しく書いてあつた。公爵は自分がバレンタインに好意を示したにも拘らず、娘を奪ひ出さうとしたりなどして恩を仇で報ゆる不徳を責め、永久に宮廷及びミランの市から追放すると命じ、その晩すぐ無理矢理に宮廷から、追ひ出した。シルビアに一會はせる事もないで。

プロチウスがミランでこんなバレンタインを邪魔してゐた間に、ペロナではジュリアがプロチウスの居ないのを非常に淋しく思ひ、遂にその惱みが控目な女の考へをも壓倒して、ミランにゐる戀人に會ふ爲にペロナを出發しやうと決心させた。

道中の危険を心配して女中のルセツタをも自分と同じ様に男の服を着せて旅に上つた。プロチウスの裏切りのためにバレンタインが市から追放されたのと前後してミランへ到着した。

ジュリアは正午頃市へ入つて、或る宿屋に落ちついた。彼女は其時只愛するプロチウスのみが思ひの總てであつたので、すぐ宿屋の亭主と話をした。そんな事からでも何かプロチウスの様子が、少し位は聞かれるだらうと思つたからである。

宿屋の亭主は、ジュリアの風采から見て、確かに高貴の生れに違ひないと思ひ、此の若い美しく紳士から（亭主はジュリア達を紳士であると思つてゐた）そんなに親しげに話しかけられた事を非常に喜んだ。亭主は性質の宜い人だつたので、ジュリアが沈んだ顔をしてゐるのを見て、氣の毒に思ひ、客人を慰めるためによい音楽を聞きに参りませうと勧めた。その晩は一紳士が、其の戀人に窓下夜曲を奏するのであつた。

ジュリアが斯様に陰氣さうに見えたのは、プロチウスがジュリアの氣高い處女の誇りと、威嚴のある性質を愛してゐた事を知つてゐたから、自分がこんなに輕卒な行爲をすれば愛人から輕蔑されるかも知れないと怖れてゐたからであつた。

ジュリアは亭主と一緒に音楽を聞きに行かうと言つたのを喜んで承知した。かういふ風にして、プロチウスに出會へるかも知れないと、心の中で思つてゐたからである。

併しジュリアが、亭主につれられて、宮殿まで來た時には、亭主が思つてゐたのとは全く反對の結果を生じた。悲しい事には、ジュリアの戀人、輕浮なプロチウスが、シルビア姫のために恰かも其時窓下夜曲を奏し、戀や賞讃の辭を述べてゐるところであつた。ジュリアはシルビアが窓の所から、プロチウスに話しておるのを洩れ聞いた。シルビアはプロチウスが眞の戀人を捨てた事や、友人バレンタインに對する不信の行ひを責め、彼の音楽や甘つたるい言葉などには耳を貸さうともしない

で窓の所を立ち去つた。

シルビアは今も尙追放されたバレンタインに忠實であり、虚偽の友プロチウスの非紳士的な行ひを憎んでゐたからである。

ジュリアはこの實景を見て、絶望に陥つたとは言へ、なほ不實なプロチウスを愛してゐた、そしてプロチウスが最近召使を無くした事を聞いたので、親切な宿屋の亭主の助をかりて、プロチウスの小姓として住み込むことに成功した。プロチウスはこの小姓がジュリアだとは知らなかつたので、手紙や贈物等を持たせて戀の敵シルビアの所に遣はし、然もベロナを去る時にジュリアから貰つた指輪までも持たせてやつたのである。

ジュリアが令嬢の所へ指輪等を持つて行つた時、シルビアは頭からプロチウスの求婚をはねつけたので、ジュリアは非常に喜んだ。そしてジュリア——と言ふよりも小姓のセバステアンは、シルビアとプロチウスとの以前の戀や、捨てられた婦人ジ

ユリアの事を非常に同情を寄せて物語り、自分は其の婦人を知つてゐると言つた。良く知つてゐる筈である、話してゐる人は當のジュリア自身なんだもの。ジュリアが何んなに戀人を愛してゐるか、そして戀人の不親切な疎略を何んなに悲しんでゐるかを語つた後、少し言葉を濁しながら言つた「ジュリアは私位の脊で、顔色も似てゐます、眼の色も髪の色も私と少しも變りません」實際男の服を着たジュリアの姿は非常な美少年に見えた。シルビアは愛する男から無残にも捨てられた憐れな婦人に心から同情した。そしてジュリアがプロチウスから頼まれた指輪を差出した時拒絶して言つた「この指輪を呉れるなんてあの人は何と言ふ恥知らずでせう。私はそんなものは受取りません。ジュリアがそれをあの人に上げたのだと言ふ事を度々聞いて知つてゐますもの。私はお前があゝの婦人を氣の毒と思つてゐるので好きになつた。こゝに財布があるから、これをジュリアの爲めに使ふ様にお前に上げやう」と。戀の競争者の口からこんな温かい言葉を聞いたので、變装してゐたジュリアの

鬱いだ氣持が引き立てられた。

話變つて追放されたバレンタインは、名譽を傷けられ、追放者として父の家に歸る氣にもなれなかつたので、途方に暮れてしまつた。そして自分の大切な寶であるシルビアを残して來たミランから程遠からぬ、或る淋しい森を彷徨ふてゐた時、追劔が出て來て金を出せと嚇し附けた。

バレンタインは自分は不幸な身の上であり、今は追放された所で、持物と言へば着てゐるこの着物より外になく、金などは全く持つてゐないと告げた。

追劔共はバレンタインの難儀をしてゐる事を聞き、その氣高い風采と男らしい振舞ひに動かされて、若し自分達と一緒に住んで、自分達の隊長即ち親分になつて呉れれば、命令通りになるが、若し自分達の申出を拒むなら殺してしまはうと言つた。

自分の事は何うなつたつて構はないと思つてゐたバレンタインは若し婦人や貧乏な旅人に暴行を加へないならばと言ふ條件で、追劔共と一緒に暮し、その親分にな

ることを承知した。

こんな風にして氣高いバレンタインは、昔のロビン、フツドの様に、追剽の親分になり法律を破る盗賊となつた。所がさうしてゐる間にシルビアに見附けられる様な事になつたのである。その次第は斯うである。

シルビアは父がツリオとの結婚を飽きでも主張して、もう斷り切れなくなつたので、それを避ける爲め、戀人が詫住居して居ると言ふ、マンツアまでバレンタインの跡を追つて行かうと決心した。併しそれは間違ひでバレンタインは未だ森の中に追剽共と一緒に暮してゐた。バレンタインは親分と呼ばれてはゐたが、掠奪の仲間には加はらず、又少しも與へられた權力をも、亂用せず、手下共が剃ぎ取つた旅人に對して慈悲を掛けてやれと命じた丈であつた。

シルビアはエグラモアと言ふ實直な老紳士を、道中の護衛役として伴れ、父の宮殿から逃げ出したがその途中、バレンタインやその仲間の盗賊共の住んでゐる森を

通らなければならなかつた。その時追剽の一人がシルビアを捕へエグラモアをも捕へやうとしたが老人は逃げてしまつた。

シルビアを捕へた追剽は、婦人が非常に恐れて居るのを見て。少しも怖れる事はない唯親分の住んでゐる岩窟へつれて行く丈である。そしてその親分といふのは高尚な人で、婦人に對しては常に同情を以ておる人であるから決して心配はいらぬと言つた。シルビアは自分が捕虜として盗賊共の親分の所へつれて行かれるのを愉快には思はなかつたが、「おゝバレンタイン。あなたの爲に私はこれを耐へ忍びませう」と言つた。

追剽が婦人を親分の岩窟まで運んで行く途中に、プロチウスが出て来てそれを遮つた。プロチウスは未だ小姓に變装してゐるジュリアを従へ、シルビアの逃げたのを知るとすぐに跡を追つて此の森迄來て、シルビアを追剽の手から救つたのであつた。然も未だシルビアが助けてもらつた御禮をも言はない前に、又もや求婚のことを

言ひ始め、不作法にも無理矢理に承諾をさせやうとした。その時側に立つてゐた小姓（流浪のジュリア）は、プロチウスが、今シルビアを救つた所なのだから、少し位はプロチウスに好意を見せるかも知れないと思つて氣が氣でなかつた。所へ不思議にもバレンタインが不意に現はれて皆を驚かせた。彼は婦人が捕へられたのを聞いてそれを助け慰める爲にやつて來たのであつた。

プロチウスは自分がシルビアを口説いてゐる所を友達に見附けられたので非常に之を恥ぢ、その場で後悔の念に責められ、心からバレンタインに與へた自分の罪惡を謝したのである、昔の英雄の様に氣高く寛大な性質のバレンタインはその罪を許し、元の様に友達としてつき合ふのみならず、俠氣を出して急に思ひ切つて言つた。

「僕はもうすつかり君を許します。そしてシルビアに對して持つてゐた僕の好意をも凡て君に譲つて僕は思ひ切りませう」處が主人の側に立つてゐた小姓のジュリアが、この思ひ切つた申出を聞いて、プロチウスが今の場合義理としてこれを拒絶

する譯に行かない様な事になるのを氣遣つて氣絶したので、皆はその介抱のために氣を取られてゐた。其時シルビアは、バレンタインがこんな寛大過ぎる友情をさう長く辛抱して居る事は出来るまいとは思つてゐたけれ共、プロチウスに自分をやるといふことには反對であつた。ジュリアは氣を取り静めてから「私はすつかり忘れて居りましたが、此の指輪をシルビアさんに渡す様に主人から命せられて居りました」と言つて指輪を差出した。プロチウスは、その指輪をよく見ると、それは自分が嘗てジュリアから貰つた指輪——之れを小姓に持たしてシルビアに遣はした——その指輪との交換に、ジュリアに與へた指輪であるのを見て「一體これは何うしたのだ。是はジュリアの指輪だ、お前は何うしてこんなものを持つてゐるのだ」と言ふと「ジュリアが私に呉れました。そしてジュリア自身でそれを此處まで持つて參りました」と答へた。

プロチウスは熱心に婦人の顔を見て、明かに小姓のセバスチアンがジュリア自身

である事を知り、然もジュリアが昔に變らぬ心や、本當の戀の證を示したので、彼の心には又ジュリアに對する愛が戻つて來た。そこでプロチウスは此の婦人を得てシルビアに對する凡ての希望を、その婦人を得るにふさわしいバレンタインに譲つた。

プロチウスとバレンタインとが仲直りをして、互に忠實な令嬢達の愛を得た幸福を語り合つてゐた時、シルビアを追つてやつて來たミラン公爵とツリオとが現れて皆を驚かした。

ツリオは真先にシルビアに近寄つて捕へやうとして言つた。「シルビアは俺の者だ。」これを聞いたバレンタインはキツとなつて「ツリオ、下れ。若し今一度お前が、シルビアは自分の者だなどと言へば、その儘には生かして置かないぞ。シルビアは此處に立つてゐる。欲しいなら俺と決闘をしてとれ。俺の戀人に息一つ觸つても承知しないぞ」と言つた。此嚇しを聞いて憶病者のツリオは尻込みして、シルビアの事

等は何とも思はないし、自分を愛しても居ない娘を得る爲に決闘する様な馬鹿な事はしないと云つた。

優れて勇敢な公爵は非常に怒つてツリオに言つた「お前の心の卑しさと墮落とが娘に對して今の様な醜い行爲をさせたのだ。だからこれ位の條件のために娘を捨てゝしまつたのだ。」そしてバレンタインの方を向いて「バレンタイン。貴下は天晴な精神を持つて居られる。貴下こそ女王の愛を受けるに足る人だ。シルビアは貴下に差上げやう。貴下こそ十分にその價値がある」と言つた。

バレンタインは公爵の手に叮嚀に接吻をして、公爵から贈物として貰つた娘を感謝の意を表しながら、受取つた。此の喜ばしい機會を利用して、バレンタインは自分が暫時森で一緒に暮した盜賊共を許す様にと、人の善い公爵に願ひ、若し彼等が心を悔ひ改めて正業に戻る事が出来るならば、あの中には仲々善人も居り、大に役に立つ人もおると保證した。この盜賊共の多くは破廉恥罪のためではなく國法に觸れ

て、バレンタインと同じく國を追放せられた人達であつたからである。公爵は喜んでこれを許した。然るに茲に今一つ残つて居るのは、友を裏切つたプロチウスに命じて、自分がなした戀ゆへの罪惡を悔ひ改めしめるために、公爵の前で、自分のした道ならぬ戀や偽りの話を凡て懺悔せしめる事であつた。良心に目醒めたプロチウスに、皆の前で懺悔させると言ふ耻辱丈でも彼に對する充分な刑罰になると判断したからである。それも終つて二組の戀人達はミランへ歸り、之が結婚式は公爵の面前に於て、非常な勝利の喜びと歡樂とを以て行はれた。

ベニスの商人

シャイロツクと言ふ猶^{ユダヤ}太人がベニスの町に住んで居り、高利貸が商賣で、基督教徒の商人達に高い利息で金を貸して随分澤山の財産を貯めてゐた。シャイロツクは頑固な爺さんで、貸した金は情^{おまけ}、容赦もなく取り立てたので、凡ての善人達から嫌

はれてゐた。中でもアントニオと言ふ若いベニスの商人は特に彼を嫌つて居り、シャイロツクも亦同様にアントニオを憎んでゐた。アントニオは困つて居る人達に金を貸して、利息を決して取らなかつたからである。さう言ふ譯で此の慾張りの猶太人と、なさけ深い商人アントニオとの間には、非常な確執があつた。何時もアントニオはリアルト市場でシャイロツクに出會ふ度に、彼が高利貸をしたり他人に酷い行爲をする事を責めた。シャイロツクは常にそれを表面上は忍耐強く聞いてはゐたが、心の内では何時かその仕返しをしてやらうと考へてゐた。

アントニオは、非常に立派な暮をして居り、世に稀な親切な人で、倦む事もなく人の世話をして居た。實際アントニオは、當時イタリイに住んで居た人々の中で、最も良く昔の高潔な羅馬人の精神を現はして居る人の一人で、あらゆる市民達から敬愛されて居り、そして彼が心から愛し親んでゐた友人に、バツサニオと呼ぶ若いベニスの貴族があつた。此のバツサニオは、親から受けた財産とても餘り澤山にな

かつたので、金のない若い貴族の例に洩れず、身分不相應に華美な生活をした爲めに、多くもない財産を殆んど使ひ盡してゐた。そしてバツサニオが金の入用の時には、いつも、アントニオが貸してやつた。二人は、全く一つの心を持ち一つの血が通つてでもゐる様に親しかつた。

或日バツサニオは、アントニオの所へ来て、自分が非常に愛してゐる金持の令嬢と結婚して、財産を回復しやうと思つてゐる事を告げた。その令嬢の父は最近になくなつたのであるが、娘に莫大な遺産を残して置いた。その父親が生きてゐる時分には、バツサニオも度々訪問し、令嬢は時々バツサニオに對して無言の好意を眼で示し、恰もバツサニオの訪ねて来るのを喜ぶと言ふ風に思はれた。然し彼はこの金持の令嬢の戀人となるにふさはしい服装を買ふ丈の金を持つてゐなかつたので、今迄の親切に加へてもう三千兩だけ貸してほしいと頼んだ。

アントニオはその時手許に貸すだけの金を持つてゐなかつたが、間もなく商品を

山の様に積んだ船が歸つて来る筈であつたので、金持の金貸シヤイロツクの所へ行つて、船を抵當にして金を借りやうとした。

アントニオとバツサニオとは一緒にシヤイロツクの所へ行つて、此の猶太人に、好きな丈の利息を拂ふから、自分の航海中の船が着いたらその商品で返すと言ふ條件で三千兩を貸して呉れないかどたのんだ。此の時シヤイロツクは心の内で考へた。「彼奴の舉足を取る事が出来りや、いつもの怨を晴らすことが出来る。きやつは我々猶太人を嫌ひやがる、金を無利息で貸出したりなどして、然も場所もあらうに、大勢商人が寄り集つてゐる處で、おれの事やおれの商賣を悪口しやあがる。おれの骨折つて儲けるものを高利と呼びやあがる。あんな奴を許して置くやうぢやおれの國の者は罰當りだ」と。アントニオは爺さんが考へ込んでゐて答へないのを見て待ち切れないで言つた。「ね、シヤイロツク、わかつたかね。金を貸して貰へるだらうね」。すると猶太人は言つた「アントニオさん、あなたはわしの貸金や利子の事で、

何度もく市場でわしの悪口雑言を言ひなすつた。わしはいつも唯肩をゆすぶつてじつと堪へてゐました。辛苦を忍ぶのはわしらの民族の運命だと諦めてゐたからです。あなたは、わしを非信者だの、噛み犬だのと呼んで、此猶太服へ唾を吐きかけ或時は野良犬か何かのやうに足蹴になすつた。扱、今日お金が要ると言つてわしの所へお出でなすつて「これシヤイロツク、金を貸して呉れ」と斯う貴殿は言はつしやる。わしは何と返辭してよいのでせう「犬に金がありますかい、三千兩を野良犬が用立てるてな事が出来ませうか」それとも腰を低くかゝめて斯う言ひませうか「且那樣、あなたは先週の水曜日には唾を吐きかけて下さいました、又いつぞやはわたしを犬とおつしやつて下さいました。其御恩に報ひまする爲に、これく丈の金子を御用立いたしまするとね」。するとアントニオは答へた「此の後とてもわしはお前を犬と呼び、唾を吐きかけ、又は蹴飛ばすかも知れない。お前が金を貸して呉れるなら、親切づくでなく。むしろ敵に貸すつもりで貸して呉れ。さうすれば、若し違

約した場合には、敵打のつもりで公々然に罰金が取立てられると言ふものだ。」

シヤイロツクは言つた「まあくさう腹を立てなすつちや困る。わしはあなたの親友になつて、これから可愛がつて頂きたいのです。恥をかゝされた事を忘れてしまつて、常座の御入用を用立てるばかりでなく、其金に對しては鏝一文の利子をも取らない量見です」此の表面上、親切さうな言葉にアントニオは非常に驚いた。そしてシヤイロツクは尙親切さうに見せ掛けて、唯願ふ處はアントニオの同情を得たのであるから、三千兩^{だけつと}を無利息で貸すと繰返した。そしてアントニオに自分と一緒に辯護士の處へ行つて、若しアントニオが期日迄に金を拂はない時には、その罰として、彼の身體の肉を一ポンドだけ、シヤイロツクが好きな所から切取つても異議はないといふ、ほんの戯談の證書に署名して呉れと言つた。

「よろしいとも。私はその證書に署名をして、猶太人も仲々親切だと言ひませう。」
 バツサニオはアントニオに向ひ自分の爲にそんな證書に署名してはいけないと

言つたが、**アントニオ**はそれでも友達の言葉をきかなかつた。その期日が来る迄には自分の船がその借金の幾層倍もの品物を積んで歸つて来る筈だつたからである。

此の話を聞いてゐた**シャイロツク**は言つた「お、祖先の**アフラハム**さま。何といふ疑ひ深いのでしよう、基督教信者達は。自分達がひよいことばかりしてゐるから、他人もやつぱりさうだらうと疑ふんだ。ね、もし、**バツサニオ**さん、よしんばあの方が期間を破つたとして、其罰金を取立て、それがわしに何の利益になります。人肉を一ポンド取立て、見た所で、羊や牛の肉だけの価値もなけりや利得にもなりません。ね、これから可愛がつてもらひたいばかりに、親切をつくさうと言ふのです。それを受けて下さればよし、そうでなけりや、あばようです」

シャイロツクは、斯様に已れの親切心からだと言つたにも拘らず、**バツサニオ**は自分の爲に、友達が冒険にも斯んな恐ろしい抵當の契約をしてはいけないと之をやる様に忠告したが、遂に**アントニオ**はそれを退けて、それは唯、猶太人の言ふや

うに戯談事だと思ひながら、その證書に署名した。

バツサニオが結婚しやうと思つてゐる金持の嗣は、**ベニス**から程遠からぬ**ベルモント**といふ所に住んでをり、名を**ポオシヤ**と呼んだ。その人格の優雅な所と言ひ、その心がけと言ひ、昔羅馬時代の**ケートー**の娘であり**フルータス**の妻であつた、あの**ポオシヤ**と何の劣る所も無かつた。

バツサニオは、友人**アントニオ**が、自分の命を抵當にしてまで深切に、都合して呉れた金で立派な家來共を従へ、**グレシヤノ**と言ふ紳士と一緒に**ベルモント**へ出發した。

斯くて**バツサニオ**は求婚に成功し、**ポオシヤ**は直ちに**バツサニオ**を自分の夫にするに承諾した。

バツサニオは**ポオシヤ**に、自分には財産がない事、誇るに足るものは唯、高貴の生れと、貴族の家柄とだけであると告白したに對し、**ポオシヤ**は「あなたの尊い性

質を愛してゐたのであり、又あなたの財産を當にせないでもよい程に金持でもありますが、只、自分があなたに相應する程、千倍ももつと美しく、萬倍ももつと金持であれば良かったのと思ふ」と優しく叮嚀に答へた。そして謹み深い**ポオシヤ**は次に自分の缺點を言ひ出した。自分は教育もなく學問もなく、又訓練も足らない者であるが、まだ年も若いからこれから勉強すると語り、**ポオシヤ**の優しい精神を**バツサニオ**に任かせるから、萬事につけて指導、教育して頂きたいと頼んだ。「わたしとわたしの財産は、今から貴下の所有になります、つい昨日迄は、わたしが此の廣い邸の主君であり、自身の女王でもあり、召使達の主人であつたのですけれど、今日からは直ぐに、此邸も召使達もこのわたしみづからも貴下のものとなるのでございませう。此指輪を右のものと一緒にあげませう。」と言ひながら**バツサニオ**に指輪を渡した。

バツサニオは、此の富裕な氣高い**ポオシヤ**が、自分の様な財産もない者を、淑や

かな態度で受入れてくれた事に對する感謝と驚きの念に壓倒されて、茫然としてゐたため、自分をそれほどまでに尊敬してゐる婦人に對して、切れ／＼の戀の言葉や感謝を言ふより外には何うして自分の喜びと尊敬とを表はしてゐるのか知らなかつた程であつた。そして指輪を受取り決して身を離さないと盟つた。

グレシアノとそして**ポオシヤ**の小間使である**子リツサ**とは、二人の主人の側に侍つてゐたが、**ポオシヤ**が非常にやさしく、**バツサニオ**の従順な妻になると約束をした時、**グレシア**ノは主人と令夫人に喜びを述べてから、自分も今結婚したいから許して頂きたいと言つた。

「よろしいとも、**グレシア**ノその心當りさへあるならば」と答へた。

グレシアノは、そこで自分は**ポオシヤ**様の美しい小間使**子リツサ**を愛してゐる事、そして**ネリツサ**も若し主人の**ポオシヤ**様が**バツサニオ**と結婚されたなら、妻にならうと約束した事などを話した。**ポオシヤ**は**子リツサ**に本當なのかと尋ねると、**子**

リツサは「奥さまが御許し下さいませれば」と答へた。ホオシヤは喜んでそれを許し、バツサニオも嬉しうに言つた「グレシアノ、わたし達の祝宴が君達の結婚式を併せて更に光榮を加へる事になる」

此の戀人達の幸福は此の時、アントニオからの怖ろしい報知を齎らした使者が到着したので妨げられた。アントニオの手紙をバツサニオが讀んだ時、顔色が眞青になつたので、ホオシヤは誰か親しい友達の死んだのを知らせて來たのではないかと心配した程であり、あなたをそれ程までに悲しませる報知といふのは一體何ですかと尋ねた「おゝホオシヤさん、こゝに書いてある數行の文字こそ、曾て紙を染めた最も不快な言葉なのです、わたしが最初貴嬢に結婚を申込んだ時に、わたしは少しも包さずお話しました。わたしの財産はわたしの血管中に流れてゐるものより外には何もないと申しました。然し無一物だと申した時に、實は、無一物よりも尙悪い境遇であると申す可きでした。私は借金をしてゐたからです」。バツサニオはそれか

ら前に述べた様な事情をすつかり話した。自分はアントニオから金を借りた事、アントニオはそれをシャイロツクと言ふ猶太人から融通して呉れた事、そして期日迄に返還しなければ、肉を一ポンド丈罰金に出すとアントニオが證書に署名した事等を話した後、アントニオの手紙を讀んだ。その手紙は次の様に書いてあつた。「バツサニオ君足下。小生の船は悉く難破致し、シャイロツクに對する證書も既に其期限を超え申候。これを支拂へば小生の命は之れなく候。願はくば最期に只一目貴君に見えたく候。但し是は便宜に任せらるべく、自ら進んで御光來の意あるにあらざれば、本書は決して貴君を強ひるものに御座なく候」とあつた。

「おゝ、あなた、何事を棄てゝも御出立遊ばせ。私はあなたの過失から、お友達が毛一筋でも失はれませぬ前に、二十倍程のお金を差上げませう。そんなに高いもので買つたのですもの。うんとあなたを愛してあげませう。」

ホオシヤはバツサニオに自分の財産に對して法律上の權利を與へる爲めに、出發

する前に結婚しやうと言つた。そこでその日すぐに結婚した。グレシアノとネリツサとも結婚した。バツサニオとグレシアノとは結婚式がすむとすぐに、大急ぎでベニスへ行つた。着いて見るとアントニオは既に牢屋に投せられてゐた。

返還の期限は既に過ぎてゐた。残酷な猶太人は、バツサニオの出した金を受取らず、強情にアントニオの肉一ポンドを取らうと言ひ張り、此の怖ろしい事件がベニスの公爵の面前で裁判される日が取決められてゐた。バツサニオは落付かぬ怖ろしい不安の裡にその裁判の日を待つてゐた。

ボオシヤは自分の夫と別れる時、快活に、お歸りになる時にはその親友をつれて来て下さる様にと願つたが、或はアントニオに不利な結果にはなりはしまいかと非常に心配した。そして一人になつた時、心の内に何うにかして自分がバツサニオの親友の生命を救ふ助けになる工夫はないかと思案した。ボオシヤは、バツサニオに對しては、あの様に優しく、妻らしい優雅な調子で萬事、夫の優れた知識に服従する

と言つたのであるけれども、今や尊敬する夫の友達が恐ろしい危険に遭遇しておるのを考へると、どうしても、ちつとしてゐる事が出来なかつた。ボオシヤは自分の實力を少しも疑はず、只自分の正しいそして完全な判断に従つて、直ちに自分自身でベニスへ行き、アントニオの辯護をしやうと決心した。

ボオシヤには辯護士をしてゐる親戚があつた。此のペラリオと言ふ人に手紙を書き、この事件をくわしく述べ、その意見を求め、尙之と共に辯護士の着る制服をも送つてくれる様にと頼んだ。使は如何に辯護すれば宜いかと言ふ助言を認めた、手紙とその準備に必要なものを悉く持つて歸つて來た。

ボオシヤは召使のネリツサと共に男の風をして、辯護士の服を着け、ネリツサを自分の書記として伴れて行つた。二人はすぐに出發して、丁度裁判のあると言ふ日に、ベニスへ到着した。裁判はベニスの元老院に於てベニスの公爵や元老院議員達の前で開かれやうとしてゐた。ボオシヤは此の高等法院へはゐつて、公爵にペラリ

オからの手紙を渡した。その手紙には、自分が出掛けてアントニオの爲に辯護したのであるが、病氣の爲に出られないから、此の若いバルサザール博士に（ポオシヤは、そんな名を用ひてゐた）自分の代理として辯護をさせていたただき度いと言ふ趣が書いてあつた。公爵はこれを許可し、そして辯護士服を着、大きな鬘をつけて巧みに變装してゐる男の若々しさを不思議そうに眺めて居た。

扱て重大な裁判が始まつた。ポオシヤはあたりを見廻し、無慈悲な猶太人や、バツサニオをも見たがバツサニオは、ポオシヤが變装してゐるとは少しも氣が付かず、友達の危険と困難とを心痛しながらアントニオの側に立つてゐた。

ポオシヤが引受けた骨の折れる仕事は、非常に重大であつたので、この優しい婦人も元氣づいて雄々しくも自分が遂行しやうと引受た義務を果さうと決心し、先づ第一にシヤイロツクに、ベニスの法律に依つて證書に書かれてある抵當を取る権利を認めると言つた。そしてシヤイロツクは知らず、何んな心の人をも感動させるや

うな優しさを以てポオシヤは慈悲の尊さを説いた。

「慈悲は恰も地上に降る雨の様なものであつて、二重の福音を持つて居る。即ちこれを與へるものに取つても幸福であれば、又これを受ける者に取つても幸福である。慈悲が君主の胸にあれば。その光は黄金の冠にも優る。慈悲は神その者の徳であるからである。従つて慈悲が、正義を和らげれば和らげる程、かの地上の權力（君主）は神に近づくのである」。そしてポオシヤはシヤイロツクに、お互が常に神の慈悲を祈つてゐる以上、やがて、私達は他人にも慈悲を施すべきである」と説いたが、シヤイロツクは唯證書に書いてある抵當を得さへすればよろしいと言ひ張つた。ポオシヤは尋ねた「商人は金を拂ふ事が出来ぬのか」と。バツサニオは猶太人に三千兩の金ど、その上欲しければ欲しいだけ餘分の金をやらうと言つたが、シヤイロツクはそれを受取らず、只アントニオの肉一ポンドを呉れよと言ひ續けた。バツサニオは博學な青年辯護士に、法律を少し位枉げてもアントニオの命を救つて頂きたいと願

つた。併し**ポオシヤ**は嚴格に、一度定められた法律は決して枉げる事はできないと答へた。**シヤイロツク**は、法律は決して枉げる可きでないと言つた、**ポオシヤ**の言葉聞いて、自分の肩をもつてくれて居ると思つて喜んで言つた。

「**ダニエル**様の再来だ。おゝ賢明なる裁判官様。私は閣下に信服します。若いにも似合はぬ名裁判官様だ。」

ポオシヤはそこで、**シヤイロツク**にその證書を見せよと言つた。そしてそれを讀み終つてから「この證書は、既に期限が切れてをるから、猶太人はこれによつて正當に**アントニオ**の胸元から肉一ポンドを切り取る権利がある」と言ひ。更に**シヤイロツク**に向つて、慈悲を掛けてやれ。金を取つてわしにこの證書は裂かせて呉れ」と言つたが、慘酷な**シヤイロツク**は慈悲の破片をも示さうとしなかつた「わしは魂にかけて誓言致しました。他人が何と言はうとこれを變へる譯にはまいりません」
「では**アントニオ**、是非に及ばぬ。其方の胸へ**シヤイロツク**の刃物を受ける用意をせ

い」と**ポオシヤ**は**アントニオ**に言つた。**シヤイロツク**は、肉一ポンドを切るのを喜んで長いナイフを研いでゐる最中、**ポオシヤ**は**アントニオ**に「何か申し残す事はなにか」と言ふと、**アントニオ**は靜かに、死ぬ覺悟はどうにして居るから、何も言ふ事はないと答へ、**バツサニオ**に向つて「**バツサニオ**君、握手を。御機嫌よう。僕が君の爲に斯う言ふ破目になつたからといつて歎いて下さるな。どうぞ奥さんへよろしく。そして何んなに僕が君を愛してゐたかを傳へて下さい」と言つた。**バツサニオ**は深い苦惱に悩みながら答へた「**アントニオ**君。僕は今現に生命よりも大切な妻を娶つてゐる。けれども、生命も、妻も、全世界も、僕に取つては、君の命以上に貴いものではない。僕は何もかも棄てよう。まう。みんな犠牲にしてかまはないからどうかして君を此の惡魔から救ひたいのです」

ポオシヤはこれを聞いて、**バツサニオ**が**アントニオ**の様な真心のある親友に對して、自分の愛をこの様な強い言葉で言ひ現はした事を、少しも無理とは思はなかつ

たが、斯う言はぬ譯にはいかなかつた「若し細君が傍にゐて、そんなに君が言つたのを聞いてゐたら、餘り有難がりもしないでしょう。」また主人の眞似をする事の好きなグレシアノは、バツサニオと同じ様な事を言ひ度いと思つて、書記の風をしてボオシヤの側に物を書いてゐたネリツサに聞える様に言つた「私にも妻があつて、非常に愛してゐるんですが、いつそ死んでしまつて天にゐて呉れたら、傳言にでも神様に直訴して、此狼のやうな猶太人の心を入替させて貰つであらうに！」

ネリツサは言つた「さういふ事は、細君に聞えない處か、空家ででも言はないと、家庭に風波が起りますよ」

シヤイロツクはもう耐へ切れずに言つた「時間が費える計りです。どうか御宣告を願ひます」法廷にゐた凡ての人々は怖ろしい豫期の内にあつて、皆の心はアントニオへの同情で満ちてゐた。

ボオシヤは猶太人に肉を計る秤器を持つてゐるかど尋ねた「シヤイロツク、其方

自辯で外科醫を呼寄せて置け。傷口をとめぬと、出血の爲めに死んでしまふかも知れない」アントニオを殺し度い一心のシヤイロツクは答へた「そんな事が證書に書いて御座いますか」

「證書には書いてないが、その位の情は、かけるのが當然ぢや」

然しシヤイロツクは只「見附かりませぬ。證書に見えませぬ」と言つた丈であつた「では、このアントニオの肉一ポンドは其方の物である。法廷はそれを認め、法律が之を其方に與へる」

「おゝ博學高明な裁判官、ダニエル様の再來だ」とシヤイロツクは再び叫んだ。そして又長い刃物を研ぎ。鋭くアントニオを見ながら言つた「さあ覺悟しろ」其時ボオシヤは叫んだ。

「しばし待て、猶太人。まだ申す事がある。此證書には、血は唯の一滴たりとも其方に與へると書いてない。明瞭に「肉一ポンド」とのみ記してある。然る上は證

書面通り肉一ポンドを取れ、併しながら若し之を切り取るに當つて、基督信者の鮮血を唯の一滴でも流すに於ては、其方の地所も家財も、ベニスの國法に依つて、悉く之をベニスの國庫に沒收いたすぞ」

シャイロツクは、アントニオの血を少しも流さずに、一ポンドの肉を切取る事は全く不可能であつた。

證書に書いてあるのは肉一ポンド丈で血ではないと言ふ、このボオシャの賢い發見はアントニオの生命を救つた。そして滿廷の人々はこの青年辯護士の驚くべき頓智に感心し、賞讃の聲は元老院の隅々に鳴り響いた。其時グレシアノはシャイロツクの口調をまねて叫んだ「おゝ、博學高明な裁判官様。どうだい猶太人。ダニエル様の再來だらう」

シャイロツクは自分の慘酷な計畫が破られたのを知つて、悲しげな顔をしてそれぢや金を受取らうと言つた。バツサニオはアントニオが思ひ掛けなくも救はれたの

で無上に喜んで叫んだ「さあ金はこゝにある」併しボオシャは静かに遮つた「待て、急ぐには及ばぬ。猶太人は科料以外のものは何もものをも受取る可きではない。だから、肉を切取る準備をせい、血は一滴も流してはならんぞ。また肉は丁度一ポンドより以外、多くも少くも切取るに於ては、よしそれが、僅かに一分又は一厘ほどの切れ端であるとも、いや唯髪の毛一筋だけの量目の差を秤皿の上に生ずるに於てはベニスの法律によつて、其方の命は無いぞ、そして其方の財産は悉く元老院に沒收したすぞ」

「元金丈を受取つて歸らせて貰ひたい」とシャイロツクは哀願しバツサニオは言つた。「どうから渡さうとしてゐたのぢや。こゝにある」

シャイロツクは金を取らうとした。その時ボオシャは又遮つて言つた「待て、猶太人其方には未だ用がある。ベニスの法律に依れば、外國人が當ベニス市民を殺さうとした場合には、その財産は國家に沒收される規定である。而して其方の一命は、

偏へに公爵の御仁慈にある。速かに土下座して公爵のお慈悲をお願い申せ」

公爵はシャイロツクに「吾々基督教信者の精神が其方など、異つてをることを知らせるために、おまへの願を聴くまでもなく、其方の一命は助けてやる。然し財産の半分はアントニオに取らせ、他の半分は國家に收めるぞ」と言ひ渡した。

然るに寛大なアントニオは、若し、シャイロツクが死後その財産を、娘とその夫とに與へると言ふ證書に署名したならば、自分の受取る可きシャイロツクの財産はシャイロツクに與へやうと言つた。夫れはシャイロツクの一人娘が、アントニオの友達であるロレンゾと言ふ若い基督教信者と、父の許を得ずに結婚したので、猶太人は非常に怒つて娘を勘當をしてしまつたのをアントニオが知つてゐたからである。

猶太人はこれを承知した。そして、自分の復讐は斯く不首尾に終り、富は奪はれてしまつたので失望して「どうかお暇を下さいます。病氣で御座います。證書は後からお送り下さい、宅で署名いたします」と言つた。公爵は「歸つてよろしい、が

命令通りに致せ。若し其方が自分の慘酷を後悔し、基督教信者となるならば、國家へ沒收する筈の他の半分の財産を許してやつてもいゝ」と言ひ聞かした。

さるほどに公爵はアントニオを放免し法廷を閉ぢ、青年辯護士の賢明と機智とに非常に感心して、食事に招いた。ボオシヤは夫より先にベルモントへ歸らねばならぬと考へてゐたので「ありがどう御座いますが、私はすぐに出發を致さねばなりませんから」と斷つた。公爵はボオシヤが止まつて一緒に食事をする暇のない事を非常に残念がり、そしてアントニオに向つて言つた「アントニオ。よく此の方に御禮を言ふがよい。お前は全く此の方のお蔭で助かつたのぢや」

公爵や元老院議員達は法廷を去つた。そこでバツサニオはボオシヤに言つた「謹んで閣下にお禮を申し上げます、わたくし並びにわたくしの親友は、今日、閣下の賢明な御裁判によつて、一命にかゝはりまする罰をまぬがれました。つきましては、猶太人に遣はします筈の此三千兩を喜んで閣下に贈呈いたしました、聊か御厚意

に報ひ度いと存じます」アントニオも言つた「尙此後幾久しく、今日の御恩を記憶して、敬愛の誠意を表したいと存じております」

ホオシヤは何うしても金を受けないと言ひ張つたが、バツサニオはあく迄も何か自分の感謝の印を受けて呉れと願つたので、ホオシヤは「あなたの手袋をいただきましたい、記念として身に附けませう」と言つた。バツサニオが手袋をぬいだ時、ホオシヤは自分が與へた指輪が指にはまつてゐるのを見附けた。實は彼の手袋を呉れよと言つたのは指輪を貰つて置いて、今度バツサニオに會つた時戲談に困らしてやらうと思つてゐたからである。そこで指輪を見ると直ぐ言つた「それからあなたの御好意に對して、その指輪をいたゞきませう」バツサニオは彼が離せない唯一つの品を辯護士に望まれたので非常に困つた。そして當惑しながら、此の指輪は自分の妻が呉れたもので、決して離さないと約束したものだから、どうしても差上げられませんが、その代りにベニス中で最高の指輪を、廣告で探し出して獻じませうと言つた

此の時ホオシヤは侮辱された様な風をして次の言葉を殘して法廷を去つた「あなたは乞食が、何ういふ取り扱ひを受けるかを、私にお教へになつたのです」

「バツサンオ君、指輪をあなたの方に差上げて下さい。奥さんの不快を招くだらうがどうかあの人の功勞とわたしの友情とを以てそれに代へて下さい」とアントニオからも頼まれ、バツサニオは自分が忘恩者と思はれるのを恥ぢて、終に同意しグレシアノにホオシヤを追つて行かせて指輪を渡させた。同様にグレシアノに指輪を與へてゐた書記のネリツサも夫に指輪を望んだ、グレシアノも（主人と同様に、寛大であると思はれたため）それを與へた。その時婦人達は、家に歸つてから、夫が指輪をなくしたのを責めきつと他の女にやつたのだらうと言つて、困らせる時の事などを想像して笑ひ合つた。

ホオシヤは、家に歸つてから、善行をしたと自覺する時に必ず起る幸福な氣持に満されてゐた。従つて見る物悉く愉快でないものはなかつた。月さへも今までより

すつと明るい様に思はれ、その月が雲間にかくれて、**ベルモント**の自宅から射してくる燈火を見ても亦楽しい想像に耽つて**ネリツサ**に言つた「あの燈火は客間から射してゐるのだが、あんな小さい燈火でさへこんなに遠く迄届くんだよ。ちよつとこんな風に、善い行爲が悪い世を照らすのだね」又家から聞えて来る音楽を聴きながら言つた「晝間聞くよりも何となく趣味が深いやうに思ふ。」

ボオシヤと**ネリツサ**とは家に入つて、元の様に女の服を着け、夫の歸りを待つてゐた。夫達もすぐ**アントニオ**をつれて歸つて來た。**バツサニオ**は**アントニオ**を**ボオシヤ**に紹介しまだ挨拶や歓迎の言葉が終らない内に、室の隅ではもう**ネリツサ**が夫と口論を始めて居た。

ボオシヤは「おやもう口論なの、どうしたのです。」と尋ねると**グレシアノ**は「奥様、**ネリツサ**が私に呉れたつまらない、金鍍金の指輪に刃物屋の小刀に彫りつけてある様な「見棄てちや厭よ」なんて文句が彫つてあつた指輪の事ですと答へた。

「文句や値段の事を言ふ必要はありません。貴下は、わたしが彼品をあげました時、死ぬ時まで身に附けてゐると誓言なすつたぢやありませんか。それに今は辯護士の書記にやつたつて。私は知つてますよ、女にやつたにきまつてますよ」

「この手に誓つて言ふ。全く若い男にやつたんだよ。小僧つ子で小さい、丈の低い少年なんだ。お前より高くはない位の、奇才縦横の辯護士で、**アントニオ**の命を救つた青年辯護士の書記で、よく饒舌る奴で、報酬に是非彼品をくれろと言つたんだ。わしは何うしても否と言へなかつたんだ」

「**グレシアノ**、それは貴下の方が悪い。**ネリツサ**から初めてあげたものを、さう軽々しくお棄てなさるのは。わたしも夫へ指輪を一つ上げました。夫は、よし世界中の財寶と取換へても、決してあの品を手離す様な事はありません」と**ボオシヤ**が言ふと、此時**グレシヤノ**は自分の罪の言ひ譯をするために言つた「**バツサニオ**さまも、御自分の指輪を辯護士にお遣りなすつたんです。そこでその書記の小僧が、奴

は書記として書きものをしたのですから、わたしのを呉れろと言つたのです」

ホオシヤはこれ聞いて非常に怒つた風に見せて、指輪を與へた事を責めた。そして**ネリツサ**の言つた事が本當で、自分も或る女がその指輪を持つてゐたのを知つておると言つた。**バツサニオ**は愛する妻がそんなに夫に反對するのを非常に悲しんで、非常な熱心を以て言つた「いや、私の名譽にかけて、婦人なんぞにやつたのではなく、法學博士に遣つたんです。三千兩を贈らうと言つたところが、何うしても受けないであの指輪をくれよと言つたのです。それを一旦は拒絶しました。すると不快な顔をして出て行つたのです。何うして其儘にして置けませう。**ホオシヤ**さんそこで止むを得ず、指輪を以てその跡を追つかけさせたのです。義理を思ひ、恥を思ふと、恩知らずといふ汚名を受けるに忍びなかつたのです。恕して下さい。若しあなたがあの場におられたなら、あなた自ら、大恩ある博士へあの指輪を遣つてくれと、きつとおつしやつたに相違ありません」

「斯う言ふ不幸な事になりましたのも、皆私が原因なのでございます」と**アントニオ**が言つた。

ホオシヤは、**アントニオ**に、そんな事と無關係にあなたを歓迎してゐるのですから決して心配して下さるなど言ふと、**アントニオ**は「私はこの身體を一旦**バツサニオ**君の爲めに抵當に入れたのです。若しあなたの夫君が指輪をあげたあの人の御蔭がなかつたなら、もう夙に我は死んでゐるのです。それゆへ、今度は、此の魂を抵當にいたしましたして、決して**バツサニオ**君が、二度と約束を破らないといふ保證人になりますから、どうか枉げて御許しを願ひます」と言ふと**ホオシヤ**は

「ではあなたを保證人にいたします。此の指輪を夫に渡して、前よりも大事にする様におつしやつて下さい」と言つた。

バツサニオはその指輪を見た時、自分が遣つたのと同じであるのを見て非常に驚いた。そこで**ホオシヤ**は自分が若い辯護士となり、**ネリツサ**を書記にしてゐた事を話

した。バツサニオは、表現する事の出来ぬ驚きと喜びとを以て、アントニオの命を救つたのは自分の妻の氣高い智慧と勇氣とであつた事を知つた。

そしてボオシヤは再びアントニオに歓迎の言葉を述べ、或機會で自分の手に入つたアントニオへの手紙を與へた。その中には、難船したと思つてゐたアントニオの船が、皆安全に港に着いた事が書いてあつた。續いて起つた思ひ掛けない幸運の爲に、この豪商の以前の怖ろしい話をすっかり忘れてしまつて、暢々とした氣持になり、指輪の悪戯や夫が妻を見分け得なかつたことなどを語り合つて大笑ひをした。グレシアノは喜んで朗讀する様な調子で誓の言葉を言つた。

一生苦勞とては何にもないが

ネリツサの指輪丈はなくしちやならぬ。

シムベリン

オウカスタス、シイサアが馬の皇帝であつた時代に、英國には（その時代フリテン國と呼んでゐた）シムベリンと言ふ王がゐた。

シムベリンの最初の妃は、三人の子供（王子が二人と王女が一人）が未だ極く小さな時に死んでしまつた。そしてイモチンと言ふ一番年上の娘のみ父の宮廷で育つたが、他の二人の王子は何うした廻り合せであつたか、子守の手から悪者に盗まれてしまつた。其時上の子は三つばかりで、下の子はほんの赤ん坊であつた。シムベリンは二人の王子が何うなつたものか、又誰が連れ去つたものかを何うしても知る事が出来なかつた。

シムベリンは再婚をした。その二度目の妃は、心の曲つた奸悪な婦人であつて、シムベリンの先妃の娘イモチンにとつては、まことに残酷な繼母であつた。

妃はイモチンを憎んでゐたけれど、自分と前の夫との間に出来た（この妃もやはり再婚であつた）息子と結婚させ度いと思つてゐた。さうして置けばシムベリン

が死んだ後、フリテン國の王冠は自分の實子クローテンの頭上に落ちるだらうと思つてゐたからである。若し王子達が見附からなければイモチン姫が王の嗣となる事は明かであつたから。然し此の計畫はイモチン姫に妨げられた。王女は父王や妃の許しも得ない計りでなく知らないまに結婚してしまつたのである。

イモチンの夫ポストユーマスは當時の最も偉い學者であり最も優れた紳士であつた。ポストユーマスの父はシムベリンの爲に敵と戦つて戦死した。その母も亦夫の死を悲しんだ餘り、まだ生れてから間も無い時に死んでしまつた。

シムベリンは此の孤兒みちこの寄る邊なき身の上を哀れみ、ポストユーマスを（父親が死んでから生れた子供だつたのでその名もシムベリンが附けてやつた）つれ歸り自分の宮廷で教育した。

イモチンとポストユーマスとは同じ先生から學問を教はり子供の時から遊び友達であつた。二人はその時分から既に深く愛し合つてゐたが、年と共に二人の愛情

は増して、遂に年頃になつてから私ひそかに結婚したのである。

妃はすぐ此の秘密を知つて失望した。妃は絶えず繼娘きよごの行動を探らせてゐたので直ぐに王にこのイモチンとポストユーマスとの結婚を話した。

シムベリンは自分の娘が、貴い身分をも忘れて臣下などと結婚した事を聞いて、非常に怒り出し、ポストユーマスにフリテン國を立ち去れと命じ、永久に國土より追放してしまつた。

妃は、イモチンが夫と別れる悲しさに同情してゐる様に見せかけて、ポストユーマスが追放を受けて後の住居と定めた羅馬へ旅立つ前に、私かに會はせて上げやうとイモチンに言つた。此の表面上は誠らしい親切も、實は自分の子のクローテンに關する陰謀をうまく進めやうと思つてやつた事に外ならなかつた。ポストユーマスが追放された後で、二人の結婚は王の許しなしにやつたのだから、正當でないと説き伏せやうと思つてゐたからである。

イモチンとポストユーマスとはいとも哀れな別れを告げた。イモチンは夫に今は亡き母からもらったダイヤモンドの指輪を與へ、ポストユーマスはその指輪を何んな事があつても離さないと約束した。そしてポストユーマスは妻の腕に腕輪をはめ自分の愛の證として大切に持つてゐる様にと頼み、二人は互に、永久に變らぬ愛と貞節とを誓つて別れを告げた。

イモチンは父の宮殿に孤獨な失望の婦人として残され、ポストユーマスは追放後の住居と定めてゐた羅馬へ着いた。

ポストユーマスは羅馬に着いてから、女の事を話すのが好きな、陽氣な若い外國人達と知り合ひになつた。誰も彼も自國の婦人の事や、自分の戀人達を賞めてゐた。ポストユーマスも常に自分の妻の事ばかりを心に思つてゐたので、自分の美くしい妻、イモチン程徳の高い賢明な、心の變らない婦人は世界中に又とないと斷言した。青年の中の一人、イアキモは自國の羅馬婦人以上に、フリテン國の婦人を譽める

のに反對して、ポストユーマスがそんなにまで譽める妻の貞節も疑はしいものだと言つて、ポストユーマスを怒らせ、散々口論をした末、ポストユーマスはイアキモがフリテンへ行つて自分の妻、イモチンの愛を勝ち得るか得ないかを試して見やうと言ふ申出を許した。二人はそこで賭かひをして、若し、イアキモがその邪よこしまな計畫に成功しなかつたならば、巨額の金を差出すが、若しイモチンの愛を勝ち得て、ポストユーマスが自分の愛の證としてあんなに大切に保存して置いて呉れと願つて與へた腕環を貰つて來る事が出來たならば、その賭の代償として、イモチンが彼と別れる時、愛の證としてポストユーマスに贈つた指輪を、イアキモにやらうと約束した。ポストユーマスは、イモチンの貞節を斯んな事をして試しても王女の尊嚴には何の危険もないと思つた程、確かなものであると信じてゐた。

フリテンに着いて後、イアキモは宮廷に招せられ、夫の友達として、イモチンから町重な歓迎を受けたが、イアキモが戀を語り始めると、王女は輕蔑して退けてし

まつた。そこで、**イアキモ**は直ぐこの無禮な計畫の成功は覺束ないと悟つた。**イアキモ**は賭に勝ちたいといふ願から、策略を以て、**ボストユーマス**を騙してやらうと考へた。これがために、**イモチン**の召使の幾人かを買収して、**イモチン**の寢室に入り、大きなトランクの中に、**イモチン**が熟睡するまで隠れ、その熟睡を待つてトランクから這ひ出し、部屋中を探し廻り、見當り次第、一々部屋の模様を書き留め、特に**イモチン**の首にある黒子ほくろを書き記し、それから**ボストユーマス**が與へた腕環を靜かに腕からはずして、再びトランクの中に隠れた。そして翌日は揚々として羅馬へ旅立ち、**ボストユーマス**に、**イモチン**が腕環を呉れた事や、一夜その寢室で過した事なぞを誇り、**イアキモ**は次のように偽を言つた。

「寢室には絹と銀糸織の壁掛タペストリーがあつた。模様は勝ち誇つたクレオパトラがアントニーに會つてをる圖であつて非常に立派な品である」

「實際だ。然し君は見ないで聞いただけかも知れない」

「それから煙突は部屋の南部にあつて、暖爐の前飾には「**ダイヤナ水浴**」の圖があつた。あんなに生き生きとした作品は見た事がない」

「これも亦君の聞いた話だらう、よく噂に上つておるから」

イアキモは更に天井の具合を精しく話しておゝ殆んど忘れてしまふところだつた。爐アンタイヤの様子を、爐は銀製の二人の「目くばせしてをる戀奴キューピット」で共に片足で立つてをる」それから腕環を取出して言つた。

「何うです。この寶物を御存じでせう。奥さんが呉れたのです。自分の腕から外してね。今でもあの人が見えるやうだ。あの人の美はしい振舞はこの贈物以上です。併しこの寶もあの人が持つてゐたればこそ價值があるのです。あの人はこれを私に呉れて言ひました。一度はこれを非常に珍重してゐた事もあつたさね」それから最後に**イアキモ**は、**イモチン**の首にある黒子の話をした。

疑ひの苦悶をもつて、この悪賢い話をすつかり聞いてゐた**ボストユーマス**は憤慨

して、イモチンの不實を叫びながら、イアキモがイモチンから腕環を貰つて歸つて来るならば、賭物として與へると約束した、ダイヤモンドの指環をイアキモに呉れてやつた。

ホストユーマスは、嫉妬の焰を燃しながら、イモチンの侍臣の一人であり、永い間ホストユーマスの親友であつたピサニオと言ふ英國の紳士に手紙を書いた。そして妻の不義の證據を語つた後、ピサニオにイモチンをウエールスの海港ミルフオード、ヘファンにつれ出し、殺してしまつて呉れよと依頼して置き、一方イモチンには自分はもう一日も會はないでは生きてゐられないから死の苦痛をも忍んでブリテンに歸り、ミルフオード、ヘファンに行くから、ピサニオと一緒に會ひに来て呉れよと詐りの手紙を書き送つた。イモチンは人の良い少しも疑心のない婦人であつたのと夫を何よりも一番愛しておつたから、命を賭けても夫に會いたいと思ひ、ピサニオと一緒に、手紙を受取つたその晩すぐに出發した。

二人の旅行がもう終らうとした時分に、ピサニオは、ホストユーマスに對しては忠實であつたけれど、その無道な命に服する程忠實ではなかつたので、イモチンに自分が受けた残酷な命令をすつかり打明けてしまつた。

自分の愛し愛されてゐる夫に會ふのではなくて、却つて夫の爲に殺されなければならぬ様な運命にある事を知つたイモチンは、計り知る事が出来ぬ悲に沈んだ。

ピサニオは極力イモチンを慰め、ホストユーマスが自分の不正を知つて後悔する時の来る迄、辛抱強く忍耐する様にと説いたが、王女はその悲歎の餘り、父の宮廷に歸る事を拒んだので、己むを得ずピサニオは王女に旅中の安全を計つて男装をすする事を勧め、王女も之に賛成し、その變装のまま羅馬に渡り、自分に對してはあんなに情れなくしておるけれど、何うしても忘れる事の出来ない夫に會はうと決心した。

ピサニオは王女の變装をすませると、どうしても宮廷に歸らねばならなかつたの

で、王女を不確な運命の手に委せて其所から立ち別れた。そして出立の前に妃からもらった、何んな病氣でも立ち所に直るといふ藥の瓶を王女に與へた。

イモチンや**ポストユーマス**の友達だと言ふので**ピサニオ**を憎んでゐた妃は、毒が入つてゐるのだと思つて實は此の瓶を**ピサニオ**に與へたのであつた。妃は侍醫に命じて獸に吞ませるのだと言つて毒藥をもつて來さしたのであつた。然し侍醫は妃の心の曲つた性質を知つてゐたので之を信せず、毒藥の代りに唯數時間の間全く死んだ様に眠らせる丈で外に何の害にもならない藥を與へたのである。此の藥を**ピサニオ**は上等の藥だと思つて、若し**イモチン**が途中で氣分の悪い様な事があればお吞みなさいと、與へたのであつた。斯うして**ピサニオ**は王女の安全と、一日も早く身に餘る困難から脱して幸福になられん事を祈つて別れを告げた。

天の加護の下に**イモチン**は不思議にも子供の時分に盗み去られた二人の弟の住居の方へ足を運ばせた。弟等を盗んだのは**ベラリウス**と言ふ**シムベリン**の宮廷の貴族

であつた。その貴族は罪もないのに王から叛逆罪に問はれて宮廷より追放を受けたので、その復讐の爲**シムベリン**の二人の王子を盗み出し、自分の住んでゐる森の中の岩窟で育てた。貴族は復讐の爲に盗み出したのではあつたけれ共、間もなく二人を自分の本當の子供であるかの様に熱愛し、念入りに教育したので二人は立派な青年になつた。王者らしい二人の精神は勇敢な行動を喜んだ。王子達は獵をして生計を立てゝゐたので爲す事はすべて活發であり大膽であり、常に自分達の親だと思つてゐる**ベラリウス**に向つては運命を拓く爲に戦争へ出して呉れと強要つてゐた。

此の青年達の住んでゐた岩窟へ**イモチン**がやつて來る様な事になつた。**イモチン**は**ミルフオード**、**ヘファン**(そこから羅馬迄船に乗らうと思つてゐた)へ行くと途中この大きな森の中で路を失つた。その上何處にも食物を求むる所が見附からなかつたので、飢と疲れとで殆ど死にそうであつた。優美に育つた若い婦人が、男の風をしてゐたので、淋しい森の中を男の様に彷徨ひ廻る疲れに堪へられなかつた事は言ふ迄も